主は、生きておられる

Unser HERR lebt



quarterly magazine
2002 Spring
vol.2









INDEX

巻頭メッセージ
04 平和と安全 ゴットホルド・ベック
07 「ハリー・ポッター」についての警告 ゴットホルド・ベック

08 特集 10年目を迎えた国際福音センター

連載メッセージ 第2回 ［モーセの十戒］
14 神の聖なる戒め ゴッドホルド・ベック

4人のメッセージ
主イエスを信じている方へ
20 主に従う者の務め 岩崎洋二
まだ、主イエスを信じていない方へ
24 良き知らせ 和田芳明
今、病気の方へ
28 絶望から希望へ 野口修
こどもたちへ
30 ロバの子 富岡徹郎

32 2002年 4月～6月 ［メッセージ当番表］
2002年［よろこびの集いスケジュール最新版］

34 シュベスターの証し

3人の証し［私たちは信じています］
40 勝野美幸［試練は神のご計画、恵みでした］
42 森崎剛［いずみちゃんは、「はい」と言ってくれた。］
44 森崎いずみ［けんかをしても、主には謝れます。二人とも］

日曜学校から
46 あおぞらひろば

イースター（復活祭）
48 イエス様のよみがえりを感謝して

50 イースターのお菓子 イースター・トルテ

51 祈りの課題／結婚・葬儀の報告

52 キリスト集会へのご案内

54 全国の集会住所録

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

vol. 2

［春号］

平和と安全

ゴットホルド・ベック

すべての人々は「平和」を必要とします。しかしすべての人々は、遅かれ早かれ、また次の戦争が始まることを知っています。神のみことばである聖書は、「未来はばら色ではない」と、はっきり言っています。これについて、権力者や政治家たちはまったく無力です。

人類は、「何を共通に持つ」べきでしょうか。まず、「平和に対する熱望」、次ぎに「自由への意思」、そして「一致への願望」です。人間はみな、「平和に対する熱望」を持っています。しかし現実には、どのような政府も、宗教も、平和をもたらすことができません。初代教会の人々は告白しています。

キリストこそ私たちの平和です。(エペソ2・14)と。

主イエス様に出会って、イエス様を受け入れた人々だけが、永遠に続く平和を持っています。

人間は「自由への意思」を持っています。何かに束縛されたいと思うような人は、一人もいないでしょう。しかし、「自分のしたいこと」だけを追求する者は、自分の欲に縛られ、自我の奴隷、罪のしもべとなります。罪は人をめくらにします。まことの自由は、ただ主イエス様に従うときにのみ存在します。

人間は「一致への願望」を持っています。不一致はトラブルや煩わしさ、悩みを引き起こします。人間が考え、無理に作り出した「一致」は長持ちせず、すぐに壊れてしまいます。初代教会について聖書は次のように述べています。

毎日、心を一つにして宮に集り、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにした。 (使徒2・46)

まことの一致は、ただ主イエス様によってのみ可能です。

私たちはあらゆる幻影や錯覚を捨てなければなりません。大切なことは、厳のように動かず、昨日も今日も永遠に変わらない主イエス様と出会い、主を知ることです。

大阪の万博でパキスタンのパビリオンに入ったとき、そこに「アラーの他に神無し。マホメッドは神の預言者なり」と大きく書かれていました。「人類の進歩と調和」(万博の標語)は、アラーとマホメッドによってもたらされるというのです。

2001年9月11日。それは忘れられない日でした。420メートルあるニューヨークの世界貿易センターとワシントンのペンタゴンは、憎しみの攻撃の的にされ、何千人の人々があっという間に生命を奪われました。その少し前に、ウサマ・ビンラディンは明言しています。「私たちの目的はアメリカに対する聖戦である」と。これらの破壊活動は、テロというよりはむしろ宗教戦争であり、人間が「宗教というもの」を持った結果です。いわゆるキリスト教の歴史を見てもそのことがわかります。約900年前、ローマ・カトリック教会は戦争を始めました。その目的は、エルサレムをイスラム教徒から解放するためでした。しかしその戦争は、一つの「宗教組織」であるローマ・カトリック教会だけの戦争であり、けっして主なる神のみこころではありませんでした。

今回のニューヨークの同時多発テロを見ても、いわゆる「宗教」が、いかにひどいものであるかがよくわかります。主なるまことの神は、「いのちと平安、また喜びと希望」を与え、悪魔は「宗教」を与えます。あらゆる「宗教」は、一部のキリスト教を含めて、悪魔の働きの結果です。そしてイエス・キリストは、「宗教と関係のないお方」です。イスラム教徒のコーランは、イエス・キリストについて何と言っているでしょうか。コーランはイエス様の処女降誕、罪のない資質、数えきれない奇蹟を認め、またイエス様はメシヤであり、遣わされた神のしもべであり、預言者であることを認めています。しかし、イエス・キリストは神であるという事実、またイエス・キリストの十字架の死の意味は、はっきりと否定しています。

聖書は何と言っているでしょうか。

偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。 (1ヨハネ2・22)

もしイエス・キリストが神でなかったら、われわれを救うことはできなかったでしょう。いくら罪のないお方であっても、イエス・キリストが単なる想像の産物であれば、決して全人類の罪の問題を解決することができなかったでしょう。コーランと違って聖書は言っています。



▲ 世界で報道されたアメリカ同時多発テロ

神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。 (1ヨハネ5・10)

また、コーランは「イエス・キリストは十字架につけられなかった」と言っています。十字架につけられたのは、似ていた者、おそらくはユダに過ぎなかったと。しかし、聖書の中心は、「イエス・キリストの十字架の死」です。約束された救い主について、はっきりと預言されています。

彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。"ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。" (使徒8・32)

また、主イエスの死がもたらした結果についても、語られています。

そこで、子たちはみな血と肉を持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

(ヘブル2・14、15)

イエス・キリストの死なくして、「罪の赦し」はありえません。たとい主イエスが罪のないお方であっても、生ける神であっても、私たちの代わりに十字架の上で死んでくださらなかったら、「罪の赦し」は存在しません。

聖書は、誰に対しても、「悪に悪を報いることをするな」と言っています。コーランは「あなたがたの敵を殺せ」といっています。敵に対して戦うのはイスラム教の義務であり、マホメッドの教えを武器でもって広めるべきであり、反発するものは皆滅ぼされるべきなのです。コーランの中には、イエス様が語られたような「山上の垂訓」の愛がありません。

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。
（マタイ5·44）

ウサマ·ビンラディンは言っています。「イスラム教徒は一体となってアメリカ人とユダヤ人を滅ぼすべきだ」と。そのためなら嘘も盗みも殺人も許されるのです。「ユダヤ人こそアラーの最大の敵であり、全人類の敵であり、決して救われることのない民族である」と。イスラム教の教義は「男は女より優れた者だから理由なしに離婚でき、妻に暴力を振るってもよい」というものです。

ある人々は言います。イスラム教とは、平和を求める宗教だと。しかし、事実を見ると、まったくその反対です。9月11日以後、パキスタンのモスクに集るイスラム教徒の多くは、主イエスを信じる人々に対して憎しみを持ち、いかにして彼らを滅ぼすかを語り合っていると報道されています。ドイツでは宗教の自由が保障されていますから、イスラム教のモスクは2000以上あります。しかしイスラム教の国々でキリスト教会はただの一つも存在しません。サウジアラビアでは聖書の所持は許されません。ドイツからサウジアラビアへ行くと、自分の聖書すら持っていてはいけないのです。外国人として現地で働いている主を信じる人々は、礼拝のために集ることを許されていません。

イスラム教徒は一日に5回礼拝し、34回アラーの前にひれ伏します。アラーは私たちを限りなく愛する神ではなく、近づき難く、恐ろしい神であって、「人間の罪を赦し、変わらない喜びを与える神」ではありません。

ローマ·カトリック教会の支配者である法王は、次のように言っています。「キリスト教の神も、ユダヤ教の神も、イスラム教の神も、同じである」と。この言葉は期せずしてローマ·カトリックの真の姿を明らかにしています。イエス·キリストを、数ある「宗教」の一つにおとしめてはばからないのです。イエス·キリストは、「いわゆるキリスト教という組織とはまったく関係のないお方であり、いわゆる宗教·組織などとは関係のないお方」です。

あらゆる「宗教」の神々は、人間が作り出した死んだ偶像にすぎません。これらの神々に頼る者は皆だまされ、不幸になり、滅びに向かいます。

聖書は、未来について次のように言っています。

人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。
（ルカ21·26）

平和と安全を願い求める者は、イエス·キリストご自身を知らなければなりません。この主イエスについてダビデ王は次のように言っています。

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。
（詩篇27·1）

ソロモン王もまた、主イエスについて次のように言っています。

主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。
（箴言18·10）

預言者イザヤも、来るべき救い主について書いています。

いつまでも主に信頼せよ。主は、とこしえの岩だから。
（イザヤ26·4）

平和と安全は、十字架の上で血を流し、犠牲になって死んでくださったイエス·キリストなしにありえません。夢中になった宗教家より危ないものはありません。「宗教」によってだまされ、めくらにされた人々はほんとにどうしようもない者になってしまいます。

私たちはどうすればよいのでしょうか。主イエス様のみことばは、よい知らせであり、また、喜びの知らせです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」
（ヨハネ5·24）

「ハリー·ポッター」についての警告

ゴットホルド·ベック

ロジャー·リンというアメリカの伝道者は、次のように書いています。

「この10年間で私が読んだものの中で、ハリー·ポッター·シリーズほど悪魔的な著作はなく、脅威そのものであると言えます。ハリー·ポッター·シリーズは、今、私たちの国の児童書の中でも、飛びぬけてよく売れている本です。どこの町でも、本屋さんの店頭にはこれらの本がうずたかく積まれ、インターネット·サイトでも宣伝や批評があふれています。また、驚いたことに、教育者やクリスチャンであるはずの教師たちですら、"子供が熱心に本を読むようになるなら、すばらしいことではないか"といった批評をしています。ハリー·ポッター·シリーズは、もともと魔術と悪魔崇拝を流布していた女性教師によって書かれた小説です。この本に登場するハリーという13歳の主人公は、魔法使いであり、その仲間とともにしばしば主なる神とイエス·キリストを冒涜し、魔術に仕え、怨みのある人には魔術によって復讐を果たします。そのために、呪文や独特の儀式が行なわれ、悪魔の力が呼びだされるのです。それはまさに子供たちにとって、悪魔の世界への、恐ろしい入り口ではないでしょうか？」と。

事実、本を読んだ子供たちの感想は次のようなものです。「ハリー·ポッターの本はすばらしい。魔法について学ぶことができるし、人を支配できるし、敵に復讐するために魔法を使うやり方がよくわかる」。またある悪魔の教会に属している子供は、「私たちは、悪魔を信じない人々や科学者たちを苦しませる呪いの方法を学んだ」。ある6歳の女の子は、「イエスは死んだわ。なぜなら彼は弱く、愚かだったからよ」。本に夢中になった9歳の子供は、「たしかに昔は日曜学校で教わったことを、私も信じていたわ。しかしハリー·ポッターの本を読んでよくわかったわ。魔法が実在するということ、そして、私が習い、それをすぐに使えるということもね。聖書に書かれていることなんか嘘だということもわかったわ！」

アメリカにある悪魔の教会の責任者は言っています。「ハリー·ポッターは悪魔の国から遣わされたヒーローだ。この本のヒットは、われわれにとってどれほど好都合なことだろう。かつて悪魔崇拝をしていた人々は公称10万人に過ぎなかったが、ここ6年でその数はうなぎ上りに増え、今では1400万人の子供たちと若者が悪魔の教会の会員になった。それはまさにハリー·ポッターの本を読んだ結果だ」。

ハリー·ポッター·シリーズは、子供たちの間で、驚くべき勢いで悪魔崇拝を巻き起こしているのです。著者であるJ.K.ローリングはどう言っているでしょうか。「私は子供たちが読む本について、干渉したり保護したりすること自体、間違っていると思います。なぜなら彼らは悪魔崇拝に魅力を感じているからです。私の本はもっと評価されてしかるべきです。なぜなら、私の本を通してはっきりと、あのイエス·キリストと言われている神の御子が、いかに弱い、愚かな者であるかを明らかにしたからです」。

アメリカの伝道者、ロジャー·リンの心からの願いは次のようなものです。「ハリー·ポッターの本を通して惑わされている1400万人の子供たち、また若者の魂のために祈りましょう。聖霊が彼らの上に強く働いてくださるように祈りましょう。今、この瞬間にもそれらの本を今読んでいるすべての人々がその被害を受けないように祈りましょう。そして何よりも子供たちの両親のために祈ってください。彼らが子供たちともっと親密になり、お互いに何でも話し合い、聖霊の働きによって信頼の環で結ばれますように。そして主イエスの栄光だけが現わされますように！」。ここに、私たちの祈るべきことのすべてが尽くされています。私たちもまた、このことについて真剣に祈りましょう。そして、その恐ろしい影響力を警戒しましょう。聖書は言っています。

あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。
（コロサイ 2·8）

不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。
（2テサロニケ 2·9−12）

このハリー·ポッター·シリーズは、映画にもなって大ヒットし、世界で多くの観客を動員しています。これもまた、本以上に危険な影響力を及ぼしています。さらに、同種の危険な本として、J.R.R.トールキン著「ロード·オブ·ザ·リングス」（日本語版は「指輪物語」3部作）があり、これも十数年前から一部の読者によく読まれています。併せてよく警戒しましょう。

特集

10年目を迎えた国際福音センター

主がくださった緑の牧場

イエス様を伝える大きな集会所と、センターが欲しい……。皆でイエス様をたたえる広い場所が欲しい……。10数年前、私たちは心を一つにして、祈りました。その祈りのお答として主が下さったのが、西軽井沢国際福音センターです。とても不可能に思えたこの願いに主は答えてくださいました。それも、人の思いをはるかに超えて！「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」（エレミヤ33･3）と、聖書にあるとおりです。この福音センターは、早くも10年目を迎え、多くの方々がここでイエス様に出会われ、主のみもとに導かれました。その数は、数千人にのぼっています。主は、この福音センターを私たちに与え、存分にお用いになられているのです。

浅間山の麓、豊かな大自然のもとで

春夏秋冬、すばらしい景観を見せる大自然に囲まれたこの福音センターは、800人が入る大ホール（集会所）を中心に、大食堂、集会室、また周辺に宿泊施設のゲストハウス、広大な駐車場を持ち、年に十数回の「よろこびの集い」や、年4回の「よろこびのコンサート」が開かれます。もちろん日曜礼拝や祈り会、洗礼式も行なわれます。また、集会の多くの若い方々はここで結婚式をあげられます。式と披露宴にはおおぜいの方々が来てくださり、感動して帰られます。時には葬儀も行なわれます。また、「よろこびの集い」には、世界各国の方々も来られます。特にキリスト集会と縁の深いドイツの方々、主に奉仕しておられるご婦人方（ディアコニセと呼ばれ尊敬されています）も、年に何度も訪れてくださり、よろこばしい語らいの場が持たれます。



2002年元旦喜びのコンサート

心ざ告げよ。主イエスの、御救いのよき訪れ。（聖歌218）

ぜひ来ていただきたい「よろこびの集い」

「よろこびの集い」は、その名のとおり、明るく、楽しい集いです。午前中は聖書からのお話（メッセージといいます）、それから、参会者の方によって「私はこうしてイエス様に出会った」、「希望にあふれた人生に変えられた」という証しが語られることもあります。食事は食堂で。通常は午後はフリーで、浅間山麓を歩くもよし、楽しく語り合うもよし、夜は聖書のお話。また、時には音楽会も開かれます。夜は清潔で快適なゲストハウスか、近くの集会の方の別荘で宿泊。「よろこびの集い」では、聖書やイエス様のことは語られますが、いわゆる宗教団体によくある説得や強制、信仰の強要といった雰囲気はまったくありません。どんな悩みも自然に心を開いて語り合うことができる、アトホームな雰囲気です。イエス様をもっと知りたい方には、ベックさんが個人的にお話してくださいます。

生きる希望があふれてくる

苦しみや悩みを持った方、人生に絶望しかかっている方、孤独に悩む方、病の方こそ、イエス様が心から迎え、その暖かい御手に抱き取ってくださる方々。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11･28）と、イエス様は呼びかけておられます。「よろこびの集い」は、そのイエス様のやさしさと救い、そしてイエス様に従って生きることのすばらしさを、ただ、あなたにお伝えしたいために開かれている集いです。

イエス様はいつもあなたに静かに呼びかけておられます。「わたしに来なさい！」と。ぜひ、あなたも「よろこびの集い」に参加して、その豊かなよろこび、やすらぎ、希望に、触れてみてください！





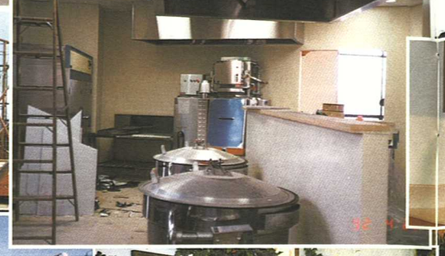










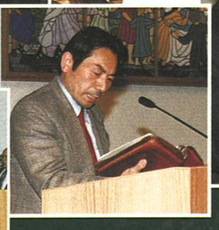














西軽井沢国際福音センター10年間のあゆみ

羽石真二、スザンネ

主の山の上には備えがある。（創世記22・14）

私たちは、この施設を管理する者として過ぎ去った10年間を振り返るとき、主の恵みの大きさを改めて深く感じます。

毎年12回前後、二泊三日で開催される喜びの集いには、平均約300名の参加者があります。食材の買出しや宿泊者の部屋割り等の準備、食事の用意や後片付け、最後の掃除に至るまで、大変な量の仕事ですが、参加者の方々が自発的に働いてくださいますので、人手がなくて困ったと言う経験をこれまでしたことがありません。

また、結婚式の際には、受付や案内、自動車の誘導、奏楽、披露茶話会のためのケーキ作りやテーブルセッティングなども、すべて奉仕によってなされています。

あるいは、春先からの庭の手入れ、夏の草刈や、秋の落ち葉掃除、冬の雪かき等も、黙々とこなしてくださる方が備えられています。

こうした陰の奉仕に支えられ、この施設はその名の通り、日本全国にとどまらず、世界中からたくさんの方々が集う場所として用いられてきました。特に、ベック夫妻と関係の深い、ドイツ各地の集会の方や、アイドリンゲン姉妹会の方は、毎年のように団体で訪れてくださっています。

必要な施設も備えられてきました。献堂式当時は、この西軽井沢国際福音センターの隣に宿泊のためのゲストハウスが一軒あるだけでした。しかし、その後、隣接地約900坪を順次購入することができ、1997年には二軒目のゲストハウスが与えられました。2000年秋には、駐車場や周囲の道路の舗装も終わり、周辺の整備も進みました。

建物の内部には、たくさんの方々から寄贈された絵画や、黒田清隆さん（群馬県前橋市在住）作の30枚にも及ぶステンドグラスが飾られるようになりました。ヨーロッパの教会にある伝統的なステンドグラスを見ますと、主イエス様の顔は、ガラスの上から絵を描いて表現されています。しかし、黒田さんのステンドグラスは、主イエス様の瞳までガラスを切りハンダ付けしたもので、世界に類を見ないものです。

他にも数え上げると切りがないほど主から恵みを受けていますが、ここでは、メアリン・シュメックペッパーさんというひとりのアメリカ人技術者との出会いと、彼の働きについて触れたいと思います。

わたし（主）の目とわたしの心は、いつもそこにある。（2歴代7・16）

メアリン・シュメックペッパーさん（以下、ペッパーさんと言います）は、アメリカのアイダホ州メリディアンという町で、空調設備関係の会社を経営している方です。施設内の暖房用ボイラーと、各部屋の温度自動調節器設置のため、1992年に初めて来日しました。その仕事の正確さ、手際の良さ、そして温厚で明るい性格に接し、アメリカから来日した50人以上の工事関係者の中でも当初から非常に印象深い人でした。

このペッパーさんは、自分の担当する工事が終わるとき、「もしよければ、施設の維持管理のために、今後毎年2回ずつ来日しますよ。」と申し出てくれました。

1992年の5月、献堂式を兼ねた初めての喜びの集いが開催された夜、電気のブレーカーの不調で、食堂棟の電気がつかなくなってしまいました。幸い地元の中部電気保安協会の方が応急処置をしてくださり、支障無く集いを続けることができました。後日、ペッパーさんが新しいブレーカーを注文し、交換してくれました。

同じく献堂式の際、貯水槽の水が無くなり、ポンプが空回りして故障し、ポンプから水が漏れるようになってしまいましたが、この修理も、後日彼が行なってくれました。

また最初の冬には、暖房用のボイラーから不凍液が漏れてしまいましたが、100kg近くある大きな不良部品を交換してくれたのも彼でした。

さらに、ペッパーさんは、当初設置されていなかった冷房設備を1996年に設置してくれました。標高1000メートル近くに建つこの施設に、冷房が必要であるとは設計当時考えていませんでした。しかし、夏、多いときには600名以上の参加者でいっぱいになる集会場や食堂は、人の熱気でずいぶんと蒸し暑くなってしまいました。既に完成した建物に大規模な冷房設備を設置するのは難しい工事だと思いますが、彼は既存の送風機の中に冷房用のコイルを追加する方法で、屋内にはまったく手を加えることなく問題を解決してくれました。冷房用の熱交換機がアメリカから東京の港に到着したときには、わざわざ輸入品を保管する倉庫まで機械の無事を確認に行き、運送業者がトラックに積みこむ際には、その場に立ち会うほどの念の入れようでした。

1997年の冬には、突然ボイラーが点火しなくなってしまいました。原因は15cmほどのスプリングが一本折れてしまって、送風用の弁が開かなくなったからでした。このときは、ちょうど彼が来日中で、すぐに補修することができました。

ほかにも、雨漏り、水漏れ、塗装の劣化、ガラス窓の損傷、機械類の不調等、時間の経過と施設の使用に伴う問題は、大なり小なり尽きることなく発生してきます。それに対応するために、予備の部品や材料をあらかじめ確保し、早い段階で補修することが現在可能となっているのは、ペッパーさんのお陰と言うほかありません。彼は、私たちの要求に応えていろいろな仕事をしてくれるだけではなく、その広範で専門的な知識に基づいて有益な提案を積極的にしてくれます。私たちは、そこに彼の善意と、主の深い配慮を感じざるを得ません。

過ぎ去った10年間を思うとき、主ご自身が私たちのことをいつも心にかけてくださり、必要をすべて満たしてきてくださったことに気がつきます。これからも、主を見上げ、主に信頼して歩んでいきたいと思います。

御代田の10年、思い出のあれこれ

キリスト集会とともに半生を送ってきた納富信子さん。「センターの建設が決まったとき、申命記11章11、12節のみことばが与えられ、計画の成就を確信しました。この聖句は今も胸に焼き付いています」

近くに住み、草取りや雪かきなどの雑用をしてきた平井正彦さん。「台風で会堂の屋根が剥がれたとき、羽石さんと二人で屋根の十字架に命綱を結び付け、こわごわ上って、ぎこちなく、それでもなんとか修理することができました」

センターの建設時、泊り込みで大工さんらの食事のお世話をした高橋艶子さん。「多くの方が献身的に手伝ってくださって、本当に感謝と喜びの日々でした。その陰にご主人がたのご理解、ご協力があったことも忘れられません。主の助けを実感しました」

ゲストハウスのお世話役、竹沢規さん。「センターができる前、第一ゲストハウスで集会が開かれ、部屋はもちろん廊下から階段、玄関の土間まですし詰めの状態でベックさんのメッセージを聞いたことがありました」

夫人は奏楽、自分は司会で結婚式のお手伝いをしてきた松見敬三さん。「思い出深いのは1998年1月15日の結婚式。地元の方々は雪かきに汗を流し、披露茶話会の間中、窓の外は猛吹雪でした」

会堂のステンドグラスを10年がかりで完成した黒田清隆さん。「会堂中央の5枚は、献堂式の3年前、軽井沢のバイブルキャンプでイエス様と出会って作り始めたものです。その後にセンターができること知り、使っていただいたのです」

キャンプのたびに食堂で調理のご奉仕をしている芳竹麗子さん。「朝食のパンは、今は外から調達していますが、以前は食堂で焼いていました。一日がかりで1500食分を焼いたこともあります」

メッセージの録音を担当の竹本隆さん。「建設中、こんな大きなもの作ってどうなるのか、と思っていましたが、それがどんどんできていく。そして最後に完成して、みんなで掃除をしたとき、どういうわけか涙がポロポロ出て止まりませんでした」

コンサートなどの録音を担当している長岡健次さん。「建設工事の手伝いをしながら、日曜ごとにベックさんの別荘で米国の大工さんらと礼拝をもったことが、懐かしく思い出されます」

御代田に住み、洗礼式の司会役をしている若山芳猛さん。「数年前、夏のキャンプの後、近くの別荘に残った方が急死して夜中に家族が駆けつけたとき、センター裏にバラ畑があることを思い出し、遺体に花を添えて祈ることができました」

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

「モーセの十戒」2

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

（出エジプト 20・1〜17）

先号に引き続いて、モーセの十戒を学んでいきましょう。

2.律法は罪が神に対する債務であることを明らかにします。

律法は、単なる教えではなく、生けるまことの神ご自身の啓示です。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」 （出エジプト 20・2）

十戒を犯すことは、十戒をお与えになった主なる神を侵すこと、すなわち神に対する過失を意味します。したがってあらゆる罪は、律法を与えてくださった神に対する債務であり、聖なる神のみこころを損なうことであり、神の権威と主権を侮辱することです。

さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。 （ローマ 3・19）

律法は罪を「債務」として明らかにし、罪人を訴え、罪に対する復讐を求めます。主なる神に対する罪の意識は、すべての人間一人一人が持っているものであり、それこそあらゆる不安と恐怖の隠れた原因です。私たち人間生活における恐怖、特に死に対する恐怖は、何というものすごい力を持っていることでしょう。

私たちは、私たちが神の戒めを守らなかったこと、そして神に対してその責任を負っていることを知っています。まことの神は、怒る神、さばく神であり、違反者を聖なるさばきで罰する神です。私たちは神の怒りの結果をいたる所で見ることができますが、しかし神の怒りについて語る人は、今日ではほとんどいないのではないでしょうか。人は自分が描いている「愛なる神」という像を壊したくないために、神の怒りについて考えたがりません。ですから人は、「怒りの神は旧約の神である」という風に考えがちですが、それがいかに神ご自身を損なう、間違ったことであるかに気がつきません。

旧約だけでなく、新約も含めた聖書全体は、さばきの神について私たちにはっきりと語っています。私たちに、イエス・キリストの十字架によって神の愛と救いを啓示する新約は、御子イエス・キリストとその聖めを受け入れない、すべての者に対する神の怒りについて、恐ろしく深刻に語っています。

生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。 （ヘブル 10・31）

聖書の中の四つの福音書、手紙、黙示録は、「神の怒り」について、そしてまた、「小羊の怒りの日」について、怒りの恐るべき日について語っています。

まだ一度も審判者としての神の恐るべき力を経験していない者は、まことの神を知っているとは言えません。自分が今まで抱えていた快く、優しいものだけの神のイメージが幼い幻想に過ぎなかったのではないかを、よく吟味しなければなりません。

3.律法は人間の内にある罪を明らかにします。

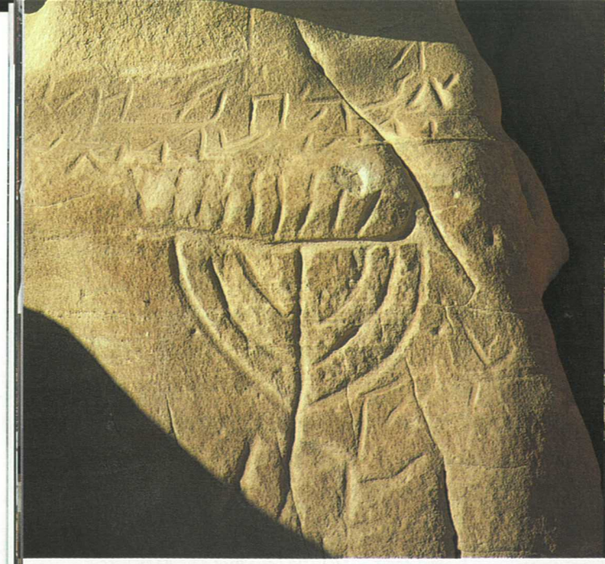
次に律法は人間の内にある罪を明らかにするものであるということについて考えてみましょう。

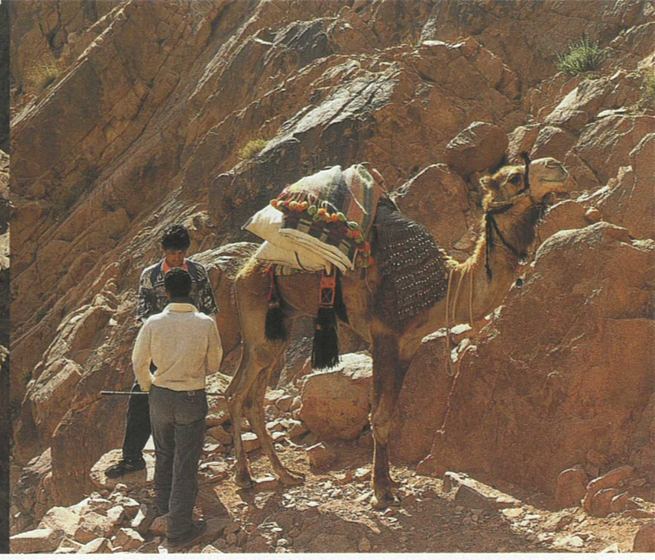
人間が生まれつき持っている罪の性質は、しばしば人間の中に隠れた形をとっているため、はっきりとは認識されずにいます。それは罪が、「行ない」によって明らかに現われてこないからです。しかし隠れた罪は歴然とした事実であり、実際に存在しています。人間の中にある隠れた罪は、知られていない体の中の病巣、つまり病気の巣のようなものであり、表に出ている病気よりもはるかに恐ろしく危険です。

いろいろなことを禁じる律法は、人間の中にある罪を刺激し、その結果、罪は生き生きとしたものになり、行ないの形で現われてきます。この罪の働く結果を、パウロは自分の経験に基づいて次のように描写しています。

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによって機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。 （ローマ 7・7〜9）

シナイ山の一番高いところから見た景色



左から、モーセの時代に描かれたつの7つ燭台の壁画／シナイ山にある修道院「カタリーネンクロースタ」
モーセの歩いた道にある家々／シナイ山にいるラクダ

律法は、人間のうちにあるものを明らかにします。つまり律法とは、人間のうちにまどろんでいる自我という虎を刺激し、その結果その虎が飛び上がり、正体を現わすように働くものです。

私たちはこのことを、イスラエルの歴史の中にも見ることができます。イスラエルの民は、自分たちのことがよくわかっていませんでした。主がイスラエルの民に律法をお与えになったとき、彼らはその律法を守るのは簡単なことだと考えてしまったのです。つまり、イスラエルの民は、「やろうと思いさえすれば、すぐにできるに違いない」と思い込んでしまったのです。ですから十分に考えることもしないで、彼らは次のように答えてしまったのです。

すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは主が仰せられたことを、みな行ないます。」それでモーセは民のことばを主に持って帰った。(出エジプト　19·8)

しかしこの言葉は、あまりにも軽率な思い上がった言葉でした。ですから主は、それゆえに律法を通して、イスラエルの民に対して彼らの心のうちにあるものがどのように罪深いものであるかを示されなければなりませんでした。

「どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。」　(申命記　5·29)

イスラエルの民の心のうちに何があったかは、すぐ明らかになりました。彼らはモーセが十戒が刻まれた石の板を持ってシナイ山から降りてくる前に、すでに口を通して彼らに語り伝えられた戒めを、もっとも恥ずべき形で破ってしまったのです。

神に対するイスラエルの民の関係を表わした第一の戒めと第二の戒めは、簡単に破られてしまいました。イスラエルの民は、金の牛の像を作ってその周りを踊りまわったのです。

そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鋳物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言った。

(出エジプト　32·3、4)

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」

(出エジプト　20·3)

という第一の戒めは、民のうちにある偶像崇拝的な思いを明るみに引き出しました。40年に及ぶ荒野を旅したときを振り返りながら、モーセは聖霊を通して次のように証しをしました。

「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」

(申命記　8·2)

このような主の導きは、今日も変わらず、主はいろいろな試練や困難を通して、人間の心のうちにあるものを明らかに示そうとなさいます。主は神の戒めに人間が従うか、従わないかの決断をするために、律法という尺度、律法という機会を与えられるのです。律法に照らして、私たちのうちにあるものを正視するとき、それは非常な衝撃をもたらします。私たちは、自分のうちにある恐ろしい状態、罪の恐るべき力を認識するとき、打ちのめされてしまいます。

あらゆる人間は、どんな罪でも犯す可能性と能力を持っています。こうした認識は非常に恐しいものですが、しかし必要です。というのは罪の力を真に認識した者だけが、神の恵みを求め始めるからです。

4.律法は罪人を訴えます。

罪人にとって、神の戒めはどのような意味を持っているのでしょうか。その答えは、「罪人を訴えるため」です。神の律法によって、罪の認識が引き起こされ、神に対する債務が明らかにされてから、罪を犯した人は神の前に訴えられるのです。

主なる神の律法は、厳格でなさけ容赦ないものです。その人がいくらいい人であっても、そうした人柄とは無関係に、その人が律法を犯したときにはのろいのもとに置かれ、特別に刑を軽くすることはなさいません。

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」

(ガラテヤ　3·10)

律法は、それ自体が律法違反者の厳しい裁判官であり、一度でも戒めを犯した者の上に、剣を振り下ろします。

それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。(ローマ　7·10)

このような恐ろしい状態の中に、ほとんどの人々が置かれているのです。彼らは死刑囚として死の独房の中に閉ざされ、死刑の判決が下されたからには、まもなく行なわれる死刑執行の瞬間を待つだけです。この状態を聖書は、「滅びる」ということばで表現しています。

私たちはみな、一人の例外もなく、滅びに至る者として定められています。その結果、罪人である人間は、律法によって恐ろしいほどの絶望的な状態に置かれます。罪人は自分が債務を負った者であること、そしてまた神によってのろわれた者であることを知るようになります。罪を認識するようになった罪人の人生は、ただ主なる神のさばき、律法に逆らう人たちを焼きつくす激しい火を恐れながら待つよりほかはないのです。

ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。(ヘブル　10·27)

5.律法は恵みへ導きます。

このような絶望的な状態に置かれた人間に対して、律法のもっとも大切な使命は、罪人を救ってくださるお方、「イエス·キリストのみもとに罪人を導く」ことです。律法は、ただ単に罪人を訴えるだけではなく、いのちへと導く働きをもするものです。律法によって滅びゆく人間は恵みを求めるようになります。ですから聖書には、**「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ　3·24)**と記されているのです。

自分の罪に絶望した罪人にとって、唯一つの逃れ道は、イエス·キリストを信じることです。

自分の行ないによって、神の前に義とされようと試み、挫折してしまったとき、その人ははじめて真に主の福音を聞く耳を持つようになります。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

(ローマ　3·28)

絶望し、死刑の判決を下され、滅びに定められ、のろわれた罪人にとって、次のみことばは何とすばらしい喜びの訪れでしょう。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

(2 コリント　5·21)

主イエス様が遣わされた目的は、何だったのでしょうか。

これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。

(ガラテヤ　4·5)

イエス·キリストによる救いの事実は、次のみことばによって明らかにされています。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト·イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト·イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。(ローマ　3·23～25)

さらにくわしく、私たちはこのすばらしい福音について見てみましょう。イエス·キリストは、「世の罪を取り除く神の小羊」になられました。イエス様は、人間の律法へのあらゆる違反を、ご自身をなげうってその身に受けてくださいました。主イエス様は私たちの債務をすべて贖ってくださいました。イエス様は、十字架につけられ、すべての人間の律法違反を、ご自身で引き受けられ、律法の違反者であるわたしたちに代わって、いのちを捨てて犠牲となってくださったのです。律法の違反者に対する神



の判決は死です。その死を、主イエス様は自ら血を流して引き受けてくださいました。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（1ペテロ　2·24）

主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。　（イザヤ　53·6）

イエス様は、私たちの代わりに神の罰をご自身の身に受けてくださったのです。神から捨てられ、のろわれることほど、恐ろしい刑罰はありません。しかしイエス様は、私たちに代わってこの恐ろしい刑罰を受けてくださいました。詩篇の22篇ほどイエス様の苦しみをはっきりと預言し、描写している箇所はありません。また、十字架上でこの22篇の冒頭を叫ばれたイエス様のことを頭に描きながらこの詩篇を読むとき、主が十字架の上で「完了した。」（ヨハネ19·30）と叫ばれたことばの深い意味を理解することができます。

罪の赦しを得た人は、次のように告白することができます。

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。　（ガラテヤ　3·13）

罪の赦し、債務の抹消、イエス·キリストの義、これらはすべて、私たち罪人に対し、イエス様を通して主が提供してくださった賜物です。絶望していた者は、提供された賜物をつかみ、滅びに沈んでいく者もまた、なんの問題もなく提供された救命具にしがみつくことができるのです。

今日、私たち人間にとって必要なことは、「罪人に対する神の戒めの必要性」を、強く、深く、認識することです。現在では自分の罪を認めている人は非常に少ないので、まことの改心を経験する者も非常に少ないのです。私たちは神の恐るべき判決について何も知らないゆえに、恵みについてもまた知ることが少ないのです。この世には自分は健康であり、自分は正しいと思っている人が大勢いますが、悲しいことにイエス様はそのような人たちの傍らを通り過ぎて行かざるをえなくなってしまっています。

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

（マタイ　9·13）

現代人は自分自身に対して何とめくらなのでしょう。自分自身のことについては、ほとんど何も知らず、神の戒めを守ることについても安易に考え、神と人の前に自分は正しい者だとすぐに思い込んでしまいます。今日とりわけ必要なのは、律法に基づき聖霊を通して引き起こされる罪の認識です。なぜなら、主はそれを通して悔い改めの賜物を送ってくだることができるのであり、イエス·キリストを罪人の救い主として認め、また受け入れることが可能になるからです。罪の意識があってはじめて、イエス様の足元に罪の女のようにひれ伏し、パウロとともに次のように告白する人々がおおぜい出てくるようになるでしょう。

キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。　（ピリピ　3·9）

今まで見てきたことをまとめましょう。「律法の結果、罪人は、罪人の救い主、イエス·キリストにまで導かれ」ます。イエス·キリストが私たちの罪の代りに罰せられたから、イエス様の死は罪人の新たな人生の土台となったのです。その結果、罪人は贖われた者となり、失われた者は救われた者となり、神に対する反逆者は神の子となり、汚れた者は、清められた者となり、正しくなかった者は正しい者となりました。

モーセの十戒は、すでにイエス様を信じる者にも大きな意味を持っています。十戒が聖なる神のみこころの表われであることは、前に見た通りです。したがって神のみこころ、つまり神の戒めは信者にとっても大切な意味を持っているのです。

神のみこころが、信者の生活にとって基準となるものだということは、確かです。というのは、神を信じるということは、神のみこころを認めて行なうということだからです。

しかし、よく考えていただきたいのは、信者にとって神の戒めはまったく新しい意味を持つということです。罪人がイエス·キリストのみもとに来ることによって、「罪人に対する律法が果たすべき使命は解決」します。救われた者は、もはや判決を下し、さばきを与える権力としての律法の下にはいません。

こういうわけで、今は、キリスト·イエスにある者が罪に定められることは決してありません。　（ローマ　8·1）

イエス·キリストが代わりに罰せられたからです。律法は、もはや手に鞭をもって、神の要求を人間に向ける養育係ではありません。

しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト·イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト·イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。

（ガラテヤ　2·16）

このことを私たちは知っていますから、もはや自分の力で律法を守ろうとする試みをしません。私たちはイエス様を信じるがゆえに、神の前に義と認められていることを知っています。ですから私たちは自分の手柄によって義と認められる必要はありません。イエス·キリストの義はそれだけで充分です。

律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。

（ガラテヤ　5·4）

このみことばは何という厳しいことばでしょうか。



イスラエルの民の歩いた道

しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。　（ヘブル　12·22）

しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。

（ガラテヤ　4·26）

モーセの十戒はシオンの山でも、エルサレムでもなく、シナイ山で与えられたものですが、シナイ山は救いを与える山ではなく、隷従をもたらす山です。そしてゴルゴタの丘に立てられた十字架のゆえに、私たちはさばきと隷従から解放されたのです。

それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。

（ローマ　7·10）

私たちは、ローマ書7章10節のみことばによると、律法によって死んだ者となり、そして死んだ人々はあらゆる律法から解放されています。信者にとっても律法はまったく新しい意味を持つのですが、それについては、この次に考えることにしましょう。

あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。　（イザヤ12·3）

主イエスを
信じている方へ

主に従う者の務め

岩崎洋二

救われる前、私の生きがいとするものは、仕事、出世、金銭的な裕福さ、幸せな家庭などでした。そして人生は一回しかないから楽しいことは徹底してエンジョイしようと考えていました。この世がすべてであり、何ごとにつけても自分が中心でしたから、そこには創造主である神様はおられませんでした。自我の強さとこの世主義が、本来すべての中心であるべき主なる神様を、どこかに押し込めてしまった状態でした。自分を中心とする者は「神はいない」と言い、神を恐れません。創造主である神から離れ、神を恐れず神に従わないことは、人間にとって最大の罪です。そのような者を聖書は愚か者と言います。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。
（詩篇　14･1）

まさにここに書かれている通り、以前の私は神を恐れない愚か者でした。しかし15年半前に私は不思議な形でキリスト集会に導かれました。自分のことを良い人間だと思い込んでいましたが、キリスト集会に毎週集ううちに目が開かれてそうではない自分を見出しました。いろいろな罪を持つ自分であることがわかりましたが、その中でも主である神様に従わない罪、すぐに神様から離れてしまう罪、神様を押しのけて自分中心になってしまう罪は、私の中にある本質的な罪であり、それは神様の前に償いようのない最も重い罪であることを自覚しました。ちょうどその頃、聖書を無性に読みたくなり、むさぼるように読むうちに驚くような事実を知りました。それはイエス・キリストによる本質的な罪の赦しです。

神様は、アダム以来すべての人間が持つ罪を赦すため、約2000年前に救いの道を設けてくださいました。神の御子であられるイエス様をこの世に人間としてお遣わしになり、罪の人間が負うべきすべての咎と罰をイエス様に身代わりとして負わせて、十字架にはりつけにされたのです。この事実によって罪の人間は、主に立ち返り心から悔い改めることによってその罪を赦していただけるようになったのです。　対象はその時代に生きるその地域の人間だけではありません。時間を超越して現在も未来も、そして世界のすべての人間に対して当てはまります。さらに驚いたことに、イエス・キリストの十字架のあがないは、そのことが起こる600年も前に聖書にはっきりと預言されていたのです。すなわち、神様は人間を愛し、人間が滅びに向かわないように永遠の救いをずっと望んでくださっていたのです。

ひとりのみどりご（イエス様）が、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
（イザヤ　9･6）

まことに、彼（イエス様）は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。……彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。
（イザヤ　53･4～6、12）

私はこのイエス様の十字架のあがないにより自分の罪を口で告白して救われました。キリスト集会に集い始めてから一年近く経ったときです。市川集会の礼拝で次のように祈りました。「イエス様。私は本当に罪だらけの人間です。良いところのない何の価値もない人間です。こんな私のためにあなた様は十字架にかかって死んでくださり、この私の罪を赦してくださいました。ありがとうございます。」集会に来て初めての祈りでした。すると、これまで味わったことのない平安と喜びでいっぱいになったのです。

私のような者が主であるイエス様から愛されている。そればかりでなく、イエス様の三日後の復活を通して、「永遠のいのち」まで約束されている。こう確信することができ、生き生きとした希望を持てるように変えられたのです。これこそが自ら体験した主からの良い知らせ、「福音」であります。それ以来、まわりの方々にもこの素晴らしい福音を知ってもらいたい、罪を告白して主の救いにあずかって欲しいと思うようになりました。

救われた当時の私は家族を含めてまわりの人たちから「本当に変わった」と言われました。主は救いを通して私たち人間を平安と喜びと希望を持つ者へと変えてくださり、神の栄光を知る知識という宝を私たち自身の中に入れてくださいます。

見よ。（救われた）あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火のあかりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。
（イザヤ　50･11）

（救われた）あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。
（マタイ　5･14）

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。
（2コリント　4･6～7）

仕事で成功したり金銭的に裕福になること、強い権力を持つこと、人から敬われたり誉められたりすること、などは有限のものです。人生を終えて死ぬときにそれらを持って行くこともできませんし、子孫に継いだとしても、やがて時間とともに消滅してしまうものです。そういうものを生きる目的と考えることはむなしいことです。しかし、創造主である神様に立ち返り、イエス様の十字架で罪を赦されて救いにあずかるということは、主の愛の中に絶対的な平安と喜びを与えられるだけでなく、やがて肉体は滅んでも霊は「永遠のいのち」へ移されるという確信と希望を持つように変えられます。このような絶対性と永遠性を持つものは、この世には存在しません。キリスト者となった私たちの務めは、まだ福音を知らないまわりの方々にこの事実を伝え、その方々の救いを主なる神様に祈ることです。パウロはテモテへの手紙の中でその務めについて次のように証ししています。

祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。
（1テモテ　1･11～12）

パウロはこの務めを全うしましたが、現代に生きる私たちキリスト者はどうでしょうか。福音をゆだねられたはずの私たちは、日常の生活の中で本当に火のともった燃えさしを持って歩き続けているでしょうか。世界の光となり、まわりの人々全部を照らす者になっているでしょうか。「救いの見本」どころか「つまずきの見本」や「救いへの妨げ」になってはいないでしょうか。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。
（黙示録　2･4～5）

冒頭に述べたように私たちは「自我」という罪の本質を持っています。キリスト者となった者が誰でも経験することですが、救われた後この世で生活をしていると、この自我という罪の本質がいつも頭をもたげてきます。

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。（マタイ　5･14）



自分は主の側についていると思っていたのに、いつのまにか自分が中心となってしまい、主から遠く離れてしまったということがよくあります。私たちはこの世でつねに、この自我との戦いをしています。この世は主不在であり、自分が中心となっています。以前の私がその典型ですが、自分の存在を意識し、自分で勉強し、努力し、自分の頭で考え、自分の意見をはっきりアピールすることが求められます。そうでない者は負け組に追いやられることもしばしばです。私たちは毎日そこに出て行き多くの時間帯を過ごしますが、「救いの見本」となり主のしもべとして「福音を伝える者」となることがキリスト者の務めです。そこで、この世とキリスト者は目指す方向が180度異なるため、真っ向から戦うことになります。しかし、その戦いは自分の力で挑んでも勝てません。その戦いは血肉に対するものでないからです。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
（エペソ　6･12）

格闘の相手はこの世の血肉、すなわち、職場の同僚とか、上司、仲間、親類などではありません。その相手はこの世で動き回っているサタンともろもろの悪霊であります。人間では太刀打ちしようがなく、結局自我という罪の本質を持った私たち自身は簡単にサタンや悪霊のとりことなり、打ち負かされて自ら初めの愛から離れてしまいます。

私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができているのです。
（2コリント　10･3～6）

この世に生きる私たちは肉にあって歩んではいても、同じ肉に従って戦ってはいけないのです。戦いの武器は肉の物ではなく、神の御前で要塞をも破るほどに力あるもの、それは主ご自身です。自我という高ぶりを打ち砕いて私たちの従順が完全になるとき、主はお働きになることができ、あらゆる不従順であるサタンともろもろの悪霊に打ち勝っていただけるのです。自我という罪を繰り返さないための秘訣はここにあります。すなわち、主への従順を全うすることによって、私たちの代わりに主に戦っていただき勝利していただける。言い換えると、自我を抑え初めの愛から離れないためにすべてのことについて主に従順となることが求められている、ということです。イエス様は幼子のように自分を低くする者が主に従順な者となると仰せられました。私たち人間の力では自我という罪の本質を制御できませんが、主に対して幼子のように従順になることによってそのことが可能になります。そのような従順は祈りによってのみ可能になることも忘れてはなりません。

聖書には、この世と調子を合わせてはいけません、とあり、一見この世との決別を求めているようにも取れます。しかし、この世にはたくさんの救われるべきたましいがあり、完全に決別してしまっては、私たちの務めである福音の宣べ伝えも救いの見本となることもできなくなってしまいます。ですから私たちキリスト者は、この世と迎合することは避けなければいけませんが、この世からいつも身を引き去っていてはいけないと考えます。　むしろ、救いの機会が与えられたと示されたら積極的にこの世に身を置くべきです。もちろん、その前提は主に戦っていただくための条件を備えることであり、幼子のように従順な信仰をもって主に祈ることです。祈りの答えとして出て行くべきでないと示されたら留まるべきです。そうでないと私たち自身が逆にこの世に引き込まれてしまい、元の自我中心に戻されてしまいます。また、救いの場とは思えないようなところとか、どう考えても救いの環境にないところにまで身を置いてはいけません。その場所と時が、みこころでないと示されたなら、そこには出て行くべきではありません。救いを成就なさるのは主であって、決して私たち人間ではないからです。

私は数年前、自分の信仰を守るためにこの世そのものである職場から極力身を避けるべきだと思うようになり、そう努力した時期がありました。しかしその後、それはつねに正しいことではない、主のみこころはそれですべて良しということではない、と気づかされました。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」
（ローマ　10･13～15）

幼子のように主に祈って、宣べ伝えるべき方々がたくさんいる職場にもっと身を置こう。　自分には良いところがないけれど、そこで救いのために主に用いていただけるようになりたい。そして1年ほど前から毎朝祈るようになりました。「イエス様。今日もこれから職場を中心とするこの世に出かけていきますが、救いを求めるたましい、整えられたたましいに出会わせてください。そのたましいをあなた様が救ってください。私は土の器でしかありませんが、みこころでしたら救いのために用いてください。私が救いを求めるたましいの妨げにならないようにあわれんでお守りください。」それ以来、職場の懇親会や取引先との会合、ゴルフなどにも出るようにしました。そして主がそこでどんな救いを見せてくださるか祈りつつ楽しみに待つようになりました。私は本当に自我の強い者ですが、この祈りによって主から離れることから守られているように感じます。それは只々主のあわれみです。

万物の終わりが近いと感じる今、「主よ。早く来てください。」と祈りつつ、職場で共に働いている同僚の方々、取引先の方々、知人、友人、同窓、親類、近所の方々をはじめ、未だイエス様に出会っていない多くの方々の救いをもっともっと真剣に祈らなくてはいけないと思います。聖書には次のように書かれています。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。　これが時至ってなされたあかしなのです。そのあかしのために、私は宣伝者また使徒に任じられ――私は真実を言っており、うそは言いません。――信仰と真理を異邦人に教える教師とされました。
（1テモテ　2･4～7）

万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。　それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みのよい管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。
（1ペテロ　4･7、10～11）



岩崎洋二
住商情報システム（株）常務、
SCSネットワークス（株）社長、神奈川県出身、
玉川中、川崎高、東京工業大学電子工学科卒

私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、
神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。（2コリント　10･4）

遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。
「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」（ローマ　10･15）







良き知らせ

和田芳明

**私たちの齢は70年。健やかであっても80年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。
それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。（詩篇　90･10）**

聖書はあなたに知恵を与えてキリスト･イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。（2テモテ　3･15）

聖書について初めて読まれる方もいらっしゃると思いますが、聖書は決してキリスト教の教科書でも道徳の書物でもありません。人間にとってもっとも必要で大切な、心の平安、耐えざる喜びを与え、希望のある将来、本当の人生の目的へと導くことのできる唯一の書物だと考えていただければよいと思います。私達は日々忙しく生活しており真の人生の目的について考える時間が少ないのではないでしょうか。例えば日常の生活の中で、健康･財産･地位･名誉･その他人間にとって望ましい物が全て与えられたとしても、心のどこかに何か一抹の不安を覚えることはないでしょうか。

それについて、フランスの思想家･数学者･物理学者であるパスカルは、人間の心の中には、イエス･キリストという空間があり、それが埋まらない限り人は何をやっても満足感がないという言葉を残しています。また、約3000年前、イスラエルのダビデという王様は、次の様に言っています。

人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか。彼は見る。知恵ある者たちが死に、愚か者もまぬけ者もひとしく滅び、自分の財産を他人に残すのを。彼らは、心の中で、彼らの家は永遠に続き、その住まいは代々にまで及ぶと思い、自分たちの土地に、自分たちの名をつける。しかし人は、その栄華のうちにとどまれない。人は滅びうせる獣に等しい。（詩篇　49･9～12）

また、このダビデ王の息子であるソロモン王は父親から全ての栄誉･地位･財産･帝国を受け継ぎました。しかし彼の記述した「伝道者の書」の中には「空」という言葉が37回も出てきます。その一部をご紹介します。

エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。……日の下には新しいものは一つもない。「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ。先にあったことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、それから後の時代の人々には記憶されないであろう。伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。私は天の下で行なわれるいっさいの事について、知恵を用いて、一心に尋ね、探り出そうとした。これは、人の子らが労苦するようにと神が与えたつらい仕事だ。私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。（伝道者　1･1～14）

そして最後に彼の得た結論がこう記されています。

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。（伝道者の書　12･13）

別の聖書の箇所には次のようなみことばがあります。

あなたはあなたの神に会う備えをせよ。（アモス　4･12）

また、驚くことに聖書には人間の寿命もはっきり書き記されています。

私たちの齢は70年。健やかであっても80年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。（詩篇　90･10）

人生において本当に大切なものは、死の直前の30分前においてもなお重要な意味を持っているものではないでしょうか。聖書を通して天地万物を創造された偉大なる方が私たちに問いかけておられるのは、まさにこの事柄です。

私自身、1985年の日航機の墜落事故を通じて主イエス様を知る機会が与えられました。それまでも、フライトの度に「もし事故が起こって死んだらどうなるのだろう」という恐れは心の奥に持っていました。しかし「私は大丈夫。」と言い聞かせていました。今から思うと全く根拠のない確信でした。常識的に考えても「沈まない船」、「落ちない飛行機」などはこの世にあり得ないのに、こと自分に関しては盲目でした。この事故が私にとってなぜそんなに衝撃的であったかというと、その航空機に、2日前に乗務していたからです。そして事故の後、「ひょっとして自分だったかもしれない」と思ったとき、今まで持っていた自信もプライドも、「死」という問題の前に何の役にも立たない事に気づかされました。そして心は全く希望のない、ペチャンコの状態になりました。そんな時にベックさんと初めてお会いしたのです。そしてすぐに二つの質問をされました。

「あなたは救われていますか?」

「今度あなたが乗務した飛行機が落ちたら平安に死ねますか?」

最初は、何を言われているのか全くわからず理解に苦しみました。しかし後になって（イエス様を信じ受け入れた後）この二つの質問は次のような意味であったと悟らされました。

「あなたは救われていますか?」とは、「将来

**預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、
聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（2ペテロ　1･21）**

への変わらない希望を持っていますか?」と聞かれたのであり、「今度あなたが乗務した飛行機が落ちたら平安に死ねますか?」とはつまり、「どんな形にせよ、死を前にしても変わらない心の平安がありますか?」という問いだったのです。

1912年4月14日北大西洋上で豪華客船「タイタニック」が氷山にぶつかり沈んだときのエピソードに、次のようなものがあります。

この船には有名な説教家ジョン･ハーパーが乗っていました。彼は冷たい海に投げ出された時、一人の漂っている青年に「あなたの魂は救われていますか」と聞きました。彼が来て二人は離れましたが、2、3分たって再び顔を合わせました。再びジョン･ハーパーは同じ質問をしました。「あなたは救われていますか」。そして彼がジョン･ハーパーをのみ込んでしまいました。その後、この青年は助けられ、ニューヨークのある教会でこの事実を語り「私はジョン･ハーパーを通して主イエス様を信じ受け入れた最後の決心者です。」と証ししたそうです。

私たちは必ずいつか「死」という問題を考える時がきます。その為に心の備えをすることが大切です。心の備えをするにはどうしたらよいか、最初のみことばの中にある「聖書」、「知恵」、「キリスト･イエスに対する信仰による救い」という3つのことを通して一緒に考えてみたいと思います。

＜聖書とは何でしょうか?＞

はじめに書きましたが、決してキリスト教という宗教の教科書ではありません。聖書は、宗教と全く関係ないイエス様の紹介であり、イエス様を自分の人生の救い主として受け入れた方に与えられる、罪の赦しと、真の希望の存在、永遠のいのちの約束によって構成されている書物です。

聖書について古今東西の著名な人々が次のような言葉を残しています。イギリスの有名な物理学者ニュートンは「世界歴史の中において聖書よりも確かな存在はない。」、アメリカのリンカーン大統領は「聖書は神が人間に下さった最高の書物である。人間の幸せにとって望ましい事が全て聖書の中にある。」、ドイツの哲学者インマヌエル･カントは「人間のために書かれたものとして、聖書が存在することは人類がかつて経験した中で最大の恵みである。その価値を滅ぼそうとするいかなる企ても人類に対する罪悪となる」と。

今挙げたニュートン、リンカーン、カントらの残した言葉の中には、宗教という言葉は出てきません。では聖書とは何でしょうか。

聖書は、新旧あわせて全部で66巻、そして40人の男の人たちによって書かれました。彼らは一同に集まってその内容を相談してまとめる事はできませんでした。なぜなら、その40人の男の人たちは時代も背景も職業も異なり、生きていた期間は1600年という時間の中でしたから。それにもかかわらず、私たちはそれぞれの人によって書かれた全ての記事の根底に流れる事実に、完全な一致を見出すことができます。これについて聖書自身が説明しています。

**預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。
（2ペテロ　1･21）**

聖書を書いた40人の人々はただ神の器であり、本当の作者は神御自身なのです。

聖書にはイエス･キリストという救い主に対する預言と誕生、そして十字架上での死と3日目の復活、そして再びこの地上に来られる再臨という事実が収められています。単なる歴史的書物なのではなく、現代の私たちに対しても、主イエス様が生きて働きかけてくださり、本当の喜びをもたらしてくださる方であることを語りつぐために記録された預言の書物です。

では、聖書が人間に与えられている目的とは何でしょうか。それは、人は主なる神の前に罪人であるということ、そしてその罪人にイエス様の十字架の贖いを通して真の生ける希望が用意されていることを知らせることです。つまり、天地万物を創造された主なる神から離れて自分勝手に生きるわがままな人間に対して、それが罪であり、その罪から解放されない限り、平安なし、希望なし、喜びなし、ただ永遠の滅びへと定められていること、しかし、そのわがままの罪を素直に正直に「ごめんなさい」と神様の前で認めるなら、主イエス様の十字架の犠牲によってその罪が赦され、イエス様のよみがえりの命を通して新しい希望の人生が与えられることを人類に知らせるのが目的です。

そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」（ルカ　24･45～47）

＜聖書が与える「知恵」とは何でしょうか?＞

決して博識にするとか聖書の知識を与えようというのではありません。新約聖書を記述した一人であり、当時の最高の教育を受け、優れた知性と教養の持ち主であったパウロは次のように証しています。

私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。

**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。
神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト･イエスです。（1テモテ　2･4～5）**

私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。（1コリント　2･6～7）

旧約聖書の中にはこう書かれています。

主を恐れることは知恵のはじめ。聖なる方を知ることは悟りである。（箴言　9･10）

つまり、主を恐れることが知恵であり、それは天地万物を創られた方から与えられるものです。そしてこの「隠された奥義としての神の知恵」とは、主イエス様を信頼して見上げ、イエス様の十字架の贖いを通して提供されている罪の赦しと、永遠のいのちの存在について知ることです。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス･キリストとを知ることです。（ヨハネ　17･3）

＜キリスト･イエスに対する信仰による救いとは何でしょうか?＞

それは、イエス･キリストの十字架の犠牲を通して提供されている愛のあらわれである罪の赦しと、永遠のいのちを自分のものにすることです。それはどのようにすれば自分のものとして頂けるのでしょうか。「頭を下げればOK」ということです。つまり、主イエス様の前に「ごめんなさい。私は今まであなたを知らないでわがままに生きてきました。また、あるいは知っていても無視して生活してきました。この事をどうぞお赦しください。そしてあなた様が私のわがままの代わりに罰を受けて死んでくださった事を感謝します。そして、これからあなた様に従って歩んでいきたいですから、どうぞ導いてください。よろしくお願いします。」と神様に向かって正直に素直に祈る事です。

以上、将来に対する心の備えのために必要な3つの事柄、「聖書」、「聖書の与える知恵」、「キリスト･イエスに対する信仰による救い」について考えてきました。では、最後の問いとして、どうして人間には罪の赦しと永遠のいのちをいただく事が大切なのでしょうか。それは罪の赦しと、永遠のいのちである救いを受け入れない人は、永遠の滅びへと定められているからです。

そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。（2テサロニケ　1･8、9）

しかし、主なるイエス様は決して人間が滅びる事を望んでいるのではなく、一人一人に対して憐れみをもって呼びかけておられます。

**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト･イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。
（1テモテ　2･4～6）**

**そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。
（1ヨハネ　5･11、12）**

この雑誌を通して始めて聖書の福音（良い知らせ=Good News）に触れられた方もいらっしゃると思います。どうかこの機会を通して本当の人生の目的を知ることができ、真の平安、変わらない喜び、希望に満ちた将来（つまり死は終わりではない）という心の備えができれば幸いに思います。最後に聖書のことばを引用して結びとします。

**あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。
（1ペテロ　1･23～25）**



和田芳明
日本航空株式会社勤務（国際客室乗務員キャビン･スーパーバイザーとして国際線･国内線乗務）
名古屋市出身、名古屋市立港北中、愛知県立熱田高、慶応義塾大学法学部中退、大蔵省関税局名古屋税関入関、約4年勤務後日本航空に入社

絶望から希望へ

野口　修

「死にいたる病」という題名の本があります。何について書かれている本だと思われますか?「癌」についてでしょうか。あるいは、最近の方なら「エイズ」についてと考えられるかもしれません。

実は150年も前にデンマークの哲学者キエルケゴールが書いた本ですが、そのテーマは癌でもエイズでもありません。「絶望」についてです。私たちを本当の意味で死にいたらせるのは、癌やエイズなどの肉体の病ではなく、心の絶望だというのです。

ある年配のアメリカ人は、自分が癌にかかっていることがわかったとき、自らの手でピストルの引き金を引き自殺しました。この悲しい実例は、人間が希望を失ってしまったら生きていくことはできないことをはっきりと示しています。

では、そんな状況で絶望せずにいることができるのでしょうか?

以前、私が担当した40歳ぐらいのご婦人がおられます。すでに手の施しようのない転移性肝癌でした。ご主人と小学生の息子さんがおられました。ご自身がもと看護婦さんでしたから、ご病状を隠すこともできず、ありのままにご説明しました。きっとショックだったことでしょう。

その晩、集会で出している「実を結ぶ命」という本をお渡しして、イエス・キリストとその救いについて簡単にお話しました。翌朝、病室を訪れますと、なんと輝くような笑顔でこう言われました。「希望を持っていいんですね…。」その後、約3週間で天に召されましたが、その間、病室を訪れた看護婦たちはその方が「私は世界で一番幸せな人間です。」というのを何度も聞きました。

何がこの方を変えたのでしょうか。イエス・キリストが自分を愛してくださり、救いを与えてくださったから、死は終わりではない、とわかったのです。

私たちは愛されているから、絶望しなくてよいのです。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(イザヤ　43・4)

たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変らぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。(イザヤ　54・10)

人間にとってもっとも重要で、欠かすことのできないのは「愛されている」と感じられることです。

私はもう孤独ではなく、いつまでも愛していてくださる方がいる。主イエスは私たちが生まれたときから、私たちのことをご存知であり、心から心配してくださっているのです。

主は私たちを決して見捨てないと約束してくださいました。それはたとえ私たちが力を失っても、立派でなくなっても、病気になったとしても変わることがありません。だから、私たちはもう絶望しなくてよいのです。

本当に困ったとき、試練のときにこそ誰が真の友であったかがわかります。そのようにあてにできる方をおもちですか?自分のことよりもあなたのことを大切にしてくれる、そのような方がおられることをご存知ですか?

どうぞ、主イエスがあなたを心から愛しておられることを知ってください。

私たちのすべての罪に赦しが与えられているから、絶望しなくてよいのです。

主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。私たちの罪にしたがって、私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって、私たちに報いることもない。(詩篇　103・8、10)

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。(ローマ　4・25)

外側からは立派な人に見えても、その内側は誰にもわかりません。賢さ、やさしさ、忍耐、誇り、勤勉さなどに混ざって、欲望、憎しみ、高慢、ねたみ、好色などが渦を巻いています。私たちはこのような自分の罪の性質から逃れることはできず、せいぜい教育という名のふたをすることができるだけです。

しかし、私たちはもう、主イエスの十字架のあがないによってすべての罪を赦されています。私たちは自分の罪を始末するためになにもしませんでしたが、主イエスがすべてを成しとげてくださったので、絶望しなくてよいのです。

私たちの罪が赦されている、ということは、私たちは神によってすっかり受け入れられている、ということです。宇宙を、いのちを支配しておられる神が「あなたの罪とがを思い出すことはしない」と約束してくださったとは、なんと勇気づけられることでしょう。

私たちすべての人間は、地上の歩みを終えた後、主なる神の前に出ることになると聖書は語っています。そのときに、この約束があるかどうかが大切になります。もしあなたにこの約束が必要であるなら、今すぐに手に入れることができます。

私たちはどんなときにも祈ることができるので、絶望しなくてよいのです。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。(詩篇　50・15)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。(ピリピ　4・6、7)

私たちの救い主、主イエスは生きておられます。私たちのことをいつも心配し、私たちの最善を望んでいてくださいます。

この方に私たちは祈り、願い、すべてをゆだねることがゆるされています。私たちの苦しみも、悩みも、願いもすべて主が耳を傾けてくださっていることを知るのは、なんとすばらしいことでしょう。全能の方が私たちの悩みを聞いてくださるので、私たちは絶望しなくてよいのです。

もちろん、最初は何をどう祈ったらよいのか見当がつかないかもしれません。心の底の最も大切な思い、それを祈りましょう。祈りの中で感謝を忘れずにささげることも大切です。感謝の祈りは私たちを苦しめる問題から、心を解き放ってくれるからです。

感謝できることがない、と感じるなら、すくなくとも祈ることができることを感謝しましょう。一緒に祈ってくれる友がいるなら、その喜びは十倍にもなるでしょう。

祈り始めることが、病や苦しみの中にあっても平安を得ることができる秘訣です。

いずれの日にか顔をあわせて主とお会いできるから、絶望しなくてよいのです。

このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(Iテサロニケ　4・17)

多くの人は長寿と健康を願いますが、本当の幸せは寿命の長さではなく、満たされた思いと将来に対する希望があるかどうかです。聖書は「死」が終わりではないことを教えています。「死」は終わりではなく、永遠の始まりです。

(そこでは)もはや、死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。(黙示　21・4)

「死」の向こうに何が待つかわからないところに不安があります。それは「無」だと考える人もいるでしょう。その人にとっては本当に「無」が待っているだけで、恐ろしいことです。でも、主イエスの救いを持つ人々にとって「死」とは永遠のいのちの入り口です。そこにあるのは喜びと感謝と賛美です。

それでは、どのようにしたら、この救い、すなわち「死」の向こうにある永遠のいのちを、手にすることができるでしょう。

このために私たちは一円も献金したり支払う必要がありませんが、どんなにお金を出しても買うことができません。

聖書を研究したり、厳しい修行を積んだりする必要はありませんが、自分の罪を認めるへりくだった謙虚な心が求められます。教会や集会に熱心に通ったり、「良い」人になる必要すらもありません。

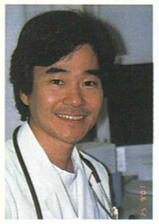
ただ、心の中で次の聖書の呼びかけに感謝することができれば十分です。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世(あなた)を愛された。それは御子(イエス)を信じる者(あなた)が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ　3・16)

私たちは喜んで、あなたに、このすばらしい福音を伝えたいと思っています。

でも、あなたを救い、あなたを変えられるのは私たちでも集会でもなく、目には見えない主イエスご自身です。ですから命を与えてくださるこの救い主に心からの祈りをささげてください。

私たちも、あなたの心にこの救いの知らせが届き、あなたが絶望から希望に変えられ、喜びに満たされることを切に祈っています。



野口　修／武蔵野赤十字病院消化器科副部長
東京都出身　西中学　早稲田大学高等学院
東京医科歯科大学医学部卒　日本肝臓学会指導医
東京医科歯科大学臨床講師(兼務)



ロバの子

富岡徹郎

皆さんは、本物のロバを見たことがありますか？　ロバといえば長い耳。絵本などにもよくでてきます。でもなかなか本物におめにかかることはありません。何年か前に、やっと動物園のかたすみで本物のロバを見つけることができました。その動物園で見たロバは、思っていたよりも大きく、とてものんびり生きている動物なんだなという印象を持ちました。

そのとき子どもたちが、「おーいのろまなロバ」とロバをからかっていました。するとロバは急に頭をもちあげ、怒ったように「フン!」と大きな鼻息を子どもにかけました。子どもはびっくりしてしまいました。そのときわたしは、意外とロバはプライドが高く、頭の良い動物なのかなと思いました。東京郊外の多摩動物公園にも、水牛舎の裏に一匹の子ロバがいます。看板もでていないため普通はわかりません。案内所で聞いてはじめてみつけました。とてもかわいい子ロバです。

吉祥寺キリスト集会の日曜学校には、長い年月歌いつがれてきた「ロバの子」という歌があります。いつ誰が紹介してくれた歌かはわかりません。実は作者も楽譜もわからないのです。（本当の作者の方ごめんなさい。）しかし今の日曜学校の先生達が子どものころから愛され、歌いつがれてきました。こんな歌です。

「ロバの子」
わたしたちは、ロバの子です。
うまのように速く走れない、
ライオンのような力なんかない、
ただのちっぽけなロバの子です。
だけどあなた知っていますか、
ロバが主のお役に立ったこと。
イエスさまを背中にお乗せして
エルサレムにおつれしたことを。
走れなくても、強くなくても
いつもイエス様がいてくださる。
私たちはロバの子です。
神さまのために、神さまのために働きます。

軽快なメロディーで、この歌を歌っているとき、子ども達の目はとても輝いています。この歌のモデルになっている出来事は、新約聖書のマタイ21章1～11節、マルコ11章1～10節、ルカ19章29～40節の三カ所に書かれています。イエス様は、十字架にかけられ処刑されることを知りながらエルサレムの町に向かっているときのことでした。オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに近づいたとき、イエス様は2人の弟子に不思議な命令をします。

「向こうの村へ行きなさい。村にはいるとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気づくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。もし、『なぜそんなことをするのか。』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます。』と言いなさい。」
（マルコ　11･2～3）

弟子達が村にはいると、表通りにある一軒の家の戸口にロバの子がつながれているのを見つけました。ロバをほどくと、「ロバの子をほどいたりしてどうするのですか?」と聞く人がいましたが、イエス様のいうとおり説明すると許してくれました。イエス様のいわれていたとおりでした。そしてイエス様は、そのロバの子にのってエルサレムに入城されました。多くの人が、自分達の上着や切ってきた木の葉を道にしいてイエス様をむかえたのです。人々は、

「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」

と叫びました。イエス様を新しい王様として迎え入れたのです。けれども王様ならば、ロバはちょっと似合いませんね。イエス様なら馬にのって堂々とはいることもできたはずです。またライオンのような強い軍勢を従えることもできたかもしれません。しかし、このときイエス様が選んだのは、たった一匹のロバの子どもでした。

私が子どものころからいまでも大切にとってある本があります。ケネス.N.テイラーという人が書いた「子どもの聖書絵物語」という絵本です。旧約から新約まで、約190の聖書の場面が絵と解説で描かれています。これはクリスチャンであったおじいさんが、クリスマスのプレゼントとして、わたしが6歳のときにくれた本です。30数年もなくならずに残っていた宝物です。（わたしの本は1966年発行という日本語初版本となっていますが、これは今でもキリスト教書店に版を重ねておかれています。）当時日曜学校にこの本を持っていくと、先生が読んでくれて説明をしてくれました。わたしはあきっぽい性格でしたが、この絵本だけは寝る前によく読んでいました。

その中の1ページに、ロバの子の背中にのってエルサレムに入城するイエス様の絵が描かれたページがありました。人々は、イエス様がエルサレムで本当の王になることを期待して、自分達の上着を道にしいたり、木の枝をかかげたりして、歓迎しました。ところがイエス様の本心は、ほんとうはこの世界の王となることではありませんでした。神様のみこころに従い、エルサレムで十字架にかかり人々の罪の身代わりとして命を捧げることでした。この絵本の絵をみていると、そのことがわかっているのは柔和なイエス様を乗せて静かに歩くロバの子だけのような気がするのです。

じつは、救い主がロバの子にのってエルサレムに入城することは、旧約聖書でも預言され、次のように書かれています。

**シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で,救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。
それも、雌ろばの子の子ろばに。**
（ゼカリヤ　9･9）

皆さんは、よく「早く,早く」という言葉を使いませんか？　現代は、すべてのものが速く動いています。ゆっくり動くことがいけないことのように感じることが多くあります。コンピュータの出現により、世界はますます速く動くようになりました。少ない時間で多くのことをこなせる人の方が、社会では重宝されます。早く早くとせかされると、人は不安になります。ロバのようにゆったりとしている動物は現代ではもっとも似合わないものかもしれないのです。しかしイエス様は、このときロバの子が必要だったのです。イエス様はロバの子を選びました。ロバの子はなぜ自分が選ばれて連れて行かれたのかわかりませんでした。ロバの子は、歌のように馬にもライオンにもなることができません。しかしあせることはありません。柔和なイエス様はありのままのロバの子が必要だったのです。選ばれたロバの子は、ゆっくりと着実にたいせつな仕事をしました。

現代に生きる私たちは、人と比べられることがとても多いです。人と比べられて劣っていると心配になります。これを劣等感といいます。こうしたことが、無気力や、いじめなどの問題を引き起こしています。これは学校だけではなく,会社や地域社会のあらゆるところでどんな人にもおこっています。すべての点で人より秀でている人などいないのですから。こうしたつらい感情からのがれる方法はないでしょうか？聖書は次のように言っています。

恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。
（イザヤ　43･5）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。
（イザヤ　43･4）

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。
（ヨハネ　15･16）

この社会の不安は日々増しています。恐ろしいことも多く起こり始めています。しかし恐れることはありません。そんなときこそ、わたしたちを創造し、心配してくださる神様に素直な気持ちで祈りましょう。私は14歳の時にイエス様を信じるように導かれました。そのときから、わたしの人生のかたわらを、いつもいっしょに歩いてくださる方がいることがわかりました。ひとりぼっちではありません。新約聖書には次のようにあります。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。
（2コリント　4･7）

この聖書のことばは、ロバの子のことをうまくあらわしていると思いませんか。私たち自身が無理をして金の器になろうとしなくてもいいのです。ありのままでも、その中にはるかにまさる宝をあふれさせてくださる方がいます。ロバをこの世界に創造した神は、次のように言われます。

わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。
（イザヤ　43･7）

後記
幼い頃に日曜学校にかよったことがあるという方も多いと思います。キリスト集会では、今も変わらずに毎日曜日の朝、日曜学校が開かれています。懐かしい歌とともに皆さんを待っています。



富岡徹郎
日本ヒューレット・パッカード（株）勤務、東京都出身、
桐朋中、桐朋高、国際基督教大学教養学部理学科卒

メッセージ当番表（4月— 6月）

「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない

		4月				5月			
		7日	14日	21日	28日	5日	12日	19日	26日
東京	10:20	飽戸	青柳	野田	野口O	白石K	藤本	辻田H	菊地
東京	14:00	小島	藤田	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田M
東京	19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	中島Y	中山Ch	中村K	野口H
市川		道川	田中J	滝	黒沢	小西	古田M	岩崎	会沢
横浜		田中J	平山	酒井M	小川	兵藤	立之	松田	山田K
相模原		江藤	松見	石井A	加藤S	飽戸	代田	神沢	旭
春日部		川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	滝	大庭
日立／土浦／大洗		羽石	南村	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田
仙台／盛岡		蘇畑	松田	松見	キャンプ	増森	片桐	菅原	須藤
青森		笠井			キャンプ				福島
掛川		辻田H	酒井M	今川	大塚	秋本	神沢	大塚	青柳
藤枝		今川	内藤	金子Y	野田	菊池	芝田	酒井M	染野
蒲郡		野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H
名古屋／豊橋		酒井M	菊池	今村	山科	江藤	和田Y	会沢	津田
大阪		キャンプ	那須	岩崎	酒井Ch	内田	森島	小久保	渡辺S
芦屋		キャンプ	河辺	伊牟田	吉田	滝	羽石	酒井Ch	新井
西神		キャンプ	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田
山口／広島／徳山		山口H	笠井	香川	森島	上田	キャンプ	瀬島	渡部Y
島根				福代			キャンプ	森田	
宮崎／小林		藤原N	上野	上田	武井	岩本	染野	武井	桜本
鹿児島／熊本		庄野	江藤		平山	石塚	重枝	羽石	加藤M
福岡／別府		浅野	岩本	古田K	庄野	重枝	山口	松井	小山田
長崎／佐世保		別所	辻田H	庄野	松井	辻田M	別所	山口H	松井
沖縄／宮古／石垣		重田S	酒井Ch	江藤	喜屋武	仲井間	喜屋武	平良M	芳竹
高知		近森	岡本H	飯守	今川	松本	重田S	池田D	伊野
高松／徳島		池田S	加藤S	会沢	松本	古田K	笠井	広橋	後藤
児島		森島	広橋	近森	内田H	久田	野間	渡辺S	内田H
松山／西条		河野	野間	岡本H	和田Y	光藤		近森	岡本M
北海道			川股	中山Y	杉本	芳竹	加藤S	中山Y	武井
伊那		岩上	片桐		岩本		中島Y		長岡
近江八幡			古田K			会沢			
川越		代田	小野沢	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	江田
御代田		若山Y	羽石	キャンプ	清水Y	キャンプ	平井	キャンプ	片桐
印旛／鹿島		岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野
富山		吉田	植原	柿沼Y	大下	片桐	長岡	富田	仲井間
宇都宮		藤井	谷口	御任	羽石	川股	金井	見目	谷口
金沢		伊牟田		重田S			伊牟田		重田S
新島									
新潟			山下		江藤		富田		柿沼M
米国／カナダ			キャンプ						
グアム				古田M				古田M	
バンコク					石井A	平山			
喜びの集い		6-7	11-15	19-21	28-29	3-5	11-12	17-19	
		大阪	ロサンゼルス	御代田	青森	御代田	広島	御代田	
祈り会		4	11	18	25	2	9	16	23
(7:30PM～)		野田	重田S	田中J	奥	蘇畑	酒井Ch	杉本	松見
ヤコブ		4. 1-3	4. 4-6	4. 7-10	4. 11-12	4. 13-17	5. 1-6	5. 7	5. 8

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。
ニューフェイス：金子稔（高知）　黒田禮吉（吉祥寺）　森田忠志（広島）　杉本文雄（吉祥寺）　上田勝巳（春日部）　山本信義（吉祥寺）　和田周作

兄弟愛を抱くようになったのですから、
互いに心から熱く愛し合いなさい。」（Ⅰペテロ1:22）

6月				
2日	9日	16日	23日	30日
酒井Ch	池田D	重田S	平山	古田K
河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
田尾	飽戸	野田	小島	大沢
柿沼M	菊池	寺田	黒田H	中山Ch
道川	内藤	山田K	立之	酒井M
宮田	野口O	会沢	辻	小西
槙野	後藤	上村	藤田	吉田
立之	深沢	川股	菊池	増森
			中山Ch	
飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
武井	芝田	白石Y	小林	平山
倉橋	清水N	大高	白石Y	清水Y
辻田H	田中J	今川	新井	松本S
池島	広田	大場	寺田	山科
森島	小久保	瀬島	中山K	長岡
田中J	久田	飽戸	渡辺S	小山
芳賀	杉本	岡本	森田	秋本
	瀬島		黒田R	
古田K	平山	松井	古田M	菅原
上野		辻田H	松井	古田M
中野	滝	別所	今村	北原
浅野	染野	加藤M	北原	庄野
池田D	蘇畑	野口T	代田	平井
金子M	松本	古田K	池田J	窪内
中山K	野間	岡本H	河野	高島
	岡本M	後藤	福島	内田H
白石K	森島	内藤	古田K	広田
藤原N	古田K	中山Y	岩下	キャンプ
植原	山田M	小野沢	中島Y	菊池
	吉田			
岩上	飯島H	上野	内藤	大庭
織田	小島	植原	長岡	辻田H
滝	末村	小西	小川	山口I
羽石	平	山下	野口O	酒井Ch
見目	野田	吉田	御任	鈴木H
		伊牟田	和田Y	重田S
	笠井			野田
		古田M		和田Y
29-5	6-13			29-30
ドイツ	ドイツ			北海道
30	6	13	20	27
牧野	佐山	山本	大須賀	和田Y
5. 9-11	5. 12	5. 13-15	5. 16-18	5. 19-20

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。
（吉祥寺）

2002年 よろこびの集い

※創刊号掲載の日程に一部変更があります。

1 January
- 12月31日－ 2日　御代田（1日:コンサート）
- 19日－20日　熊本
- 24日－27日　グアム

2 February
- 2日－ 3日　沖縄
- 9日－10日　高松
- 14日－17日　バンコク
- 23日－24日　豊橋

3 March
- 2日－ 3日　大洗
- 9日－10日　別府
- 16日－17日　盛岡
- 22日－25日　バンクーバー
- 30日－31日　高知

4 April
- 6日－ 7日　大阪
- 11日－15日　ロサンゼルス
- 19日－21日　御代田
- 28日－29日　青森

5 May
- 3日－ 5日　御代田(4日:コンサート)
- 11日－12日　広島
- 17日－19日　御代田
- 29日－6月5日　ドイツ・ミヘルスベルク

6 June
- 5日－12日　ドイツ・ミヘルスベルク
- 29日－30日　北海道

7 July
- 6日－ 7日　松山
- 13日－14日　富山
- 19日－21日　御代田
- 26日－28日　御代田

8 August
- 2日－ 4日　御代田
- 9日－11日　御代田(10日:コンサート)
- 16日－18日　御代田
- 23日－25日　御代田

9 September
- 7日－ 8日　仙台
- 14日－15日　神戸
- 20日－22日　御代田
- 28日－29日　宮崎

10 October
- 5日－ 6日　福島
- 13日　東京「メサイア」コンサート
- 18日－20日　御代田
- 26日－27日　徳島

11 November
- 1日－ 3日　御代田
- 9日－10日　島根
- 15日－18日　バンコク
- 21日－24日　サンフランシスコ
- 30日－12月1日　新潟

12 December
- 7日－ 8日　福岡
- 14日－15日　沖縄
- 31日－1月2日　御代田(1日:コンサート)





主の栄光を国々の中で語り告げよ。（詩篇96・3）

ようこそ！ドイツのシュベスターのみなさま。

昨年の11月、2週間にわたって、ドイツからシュベスター（主にある姉妹）の方々がキリスト集会に来てくださいました。この方々は、ドイツで一生を主に捧げて主にご奉仕しておられるご婦人方で、ディアコニセと呼ばれ尊敬されている方々です。東京、西軽井沢、沖縄などの集いに参加し、17人の方々が各地でお話と証しをしてくださいました。ほとんどの方は顔なじみで、言葉の壁を越えて親しい交わりができたことは大きな喜びでした。その時に語られたお話の要旨を、私たちへのすてきな「霊的なプレゼント」として、ここにご紹介いたします。



主は望んでおられる。「答えたい。導きたい。祝福したい。」

Schwester Angelika Burkhardt シュベスター・アンゲリカ 78歳　（11月10日　国際福音センターにて）

時々、朝目覚めて、主のご臨在を感じてうれしくなります。主は私に語ってくださいました。**「わたしは、あなたの神、主である。」（詩篇50・7）**と。私は喜びでいっぱいになりました。**「感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き方に果たせ。苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。」（詩篇50・14、15）**　主に感謝するとは、ある意味で犠牲や捧げものを捧げることです。「私の生涯のすべては、主がお使いになる」という心構えを持つことを、主は望んでおられます。だって、私たちは主イエス様の貴い血によって買い取られた者なのですから。イエス様によって贖われ、救われたと言える者は、心から主を賛美することができます。イエス様の血によって罪が赦されるだけでなく、罪からも解放されます。「感謝のいけにえを神にささげる」とは、「主にだけ忠実に仕えなさい」、という意味です。主に対する「愛、従順、信頼」こそが大切です。誰でも「自分は不適格な者だ」と思うでしょう。でも、私たちはいつでも悔い改めることができます。「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。」私たちがどんな問題を持っているかが問題ではなく、主を呼び求めると主は必ず答えてくださる、ということが重要です。私たちの主は、いつも、「答えたい、導きたい、祝福したい」と心から望んでおられるお方です。

もっと主のために！

（11月17日　沖縄よろこびの集いにて）

日本の美しい山々や海、そこに泳いでいるきれいな魚を見ると、創造主の偉大さに感動します。こうして日本にやってきて、日本のみなさまの、主への愛、私たちへの愛に包まれ、ともに過ごすことを通して、「もっともっと主にお仕えしたい、主のために生きたい」と励まされました。私たちはみな、主によって救われ、主にあって一つです。それは何という貴い富であり、すばらしい神様のプレゼントでしょう。でも、私たちにとって一番大切なのは、目に見える世界ではなく「目に見えない世界」、主によって用意されている「永遠の世界」ではないでしょうか。私たちを心から愛してくださる主を、ほめたたえたい気持ちでいっぱいです。このすばらしい、永遠から永遠に至る主の愛を、もっともっと多くの人々にお伝えしたい、主に用いられたい、と願わずにはいられません。**「来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。」（詩篇95・6）**



私たちはキリストにあって一つのからだ

Schwester Edith Schlüter　シュベスター・エデッツ　67歳　（11月17日　沖縄よろこびの集いにて）

ある若い宣教師は、毎朝必ず、次のみことばを読んで一日を始めたそうです。**「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」（ローマ12・1）**　そして、このみことばは、私がアイドリンゲン姉妹会に入るきっかけともなりました。ここに書かれている「捧げ物」とは、「死んだ物」ではなく、「生きているもの」です。つまり、「私たちの全生涯は、主に用いられ」なければなりません。主は私たち人間を、一人残らず愛しておられます。ですから主は、私たちもまた、「人々を一人残らず愛する」ように求めておられます。私たちの周りにいる、悩んでいる人々、苦しんでいる人々、孤独な人々に主を伝え、励ますために、主は私たちをお召しになったのです。「主よ。みこころをお示しください」と心から祈るとき、主は必ず、何が正しく、何が必要か、何をなすべきかを教えてくださいます。主は私たちの主であり、支配者ですから、私たちは主のみこころを知るべきであり、みこころに従うべきです。主は生きておられるお方ですから、私たちに何をなすべきかをはっきりと示してくださいます。主は私たちの祈りをいつも聞いていてくださり、必要なことを知っておられて、導いてくださいます。**「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」（ローマ12・5）**とみことばにあるように、主から与えられた賜物は自分のためではなく、みんなのためのものです。**「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」（ピリピ2・2、3）**主があなたがたを豊かに祝福してくださいますように。

主は真実なお方

（11月10日　国際福音センターにて）

私はアイドリンゲン・ムッターハウスに住んでいます。日本の皆様がアイドリンゲンに来てくださることは、私たちにとって大きな励ましです。そして、私たちは皆もう少しで、言葉の壁のない天の御国に行き、もっと楽しい語らいができますね。**「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。」（1テモテ6・12）**　信仰の生活は戦いであり、私たちはこの世では寄留者です。私たちが自分の知恵や理性に頼ると、この戦いは必ず敗北に終わります。**「信仰から出ていないことは、みな罪です。」（ローマ14・23）**　私たちは日々の生活の中で、自分で考えて決定するか、主のみこころを聞いて、みこころだけがなるようにと祈るかのどちらかです。**「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」（1テモテ2・4）**　その神が導いてくださったから、私たちは救われたのです。私は小さいころから忠実でありたいと望んでいました。学校で好きなみことばとして選んでのは、**「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」（黙示2・10）**でした。将来はシュバイツァーのように、宣教師としてアフリカに行きたいと望んでいました。自分は人よりも強く、考えもしっかりしていると思っていました。しかし、それらのものは何の役にも立たず、私は惨めな敗北者としてアイドリンゲンのムッターハウスに導かれました。主の憐れみで、私は悔い改めることができました。アイドリンゲンの責任者は、私に大学で学ぶようにと勧められました。「専門的に学んだ教師を、われわれは必要としています」と。その時、私の望みや考えはまったく消えてしまい、「主よ。どうかあなたのみこころがなりますように」とだけ祈っていました。**「キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。まさしく、誇る者は主にあって誇れ、と書かれているとおりになるためです。」（1コリント1・30、31）**　このみことばによって、「必要なことはすべて主が与えてくださるのだ」という確信が与えられました。31年前、大学を卒業した年、アイドリンゲンのムッターハウスは、ミヘルスベルグの建物を買うことになりました。その式典の中で、この同じみことばが引用されました。主は、ご自身が支配者であり、人間は決して誇ることのないようにと注意してくださるお方です。**「私たちは真実でなくても、彼（主）は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」（2テモテ2・13）「次のことばは信頼すべきことばです。もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。」（2テモテ2・11）**私は、この真実なお方である主を、何度も体験しました。もし、あなたがまだこの主の真実を体験しておられないなら、主に頼ってください。主は真実であり、また忠実なお方です。



主の恵みは台所の野菜や果物まで

Schwester Ella Klauß　シュベスター・エラ　66歳　（11月14日　神楽坂家庭集会にて）

私はムッターハウス、アイドリンゲンの台所で、料理を教えたり、食材の購入、管理の仕事をしています。先日も、大きな貯蔵用の冷蔵庫が駄目になっていて、たくさんの野菜や果物が無駄になるところでしたが、主は不思議な方法で守ってくださいました。主は恵みによって私たちを導き、支配なさるお方です。私自身も、悔い改めと、主を見上げる恵みをいただき、改めて主に喜んでお仕えするようにしてくださいました。



主はいつも私たちのそばに

Schwester Erika Schnitzer　シュベスター・エリカ　59歳　（11月18日　沖縄よろこびの集いにて）

あなたが険しい山を、重い荷物にあえぎながら登っている時、突然ひとりの人が現れ、あなたの荷物を持っていっしょに歩いてくれる、と想像してみてください。「**私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる。**」（詩篇59・10）と、ダビデは証ししています。主は私たちが知らない道、危険な道を共に歩いてくださり、必要な時に助けを与えてくださいます。ダビデはまた、「**私はあなたの恵みに拠り頼みました。**」（詩篇13・5）と告白しています。恵みとは、主の豊かな祝福を体験することです。ダビデが困難な道を歩いた時、主は必要な時に必要な助けを与えられました。どのように暗い道でも、主は必要な光を与え、導かれます。ダビデがサウルの迫害から逃れる時、人間的な力に頼ったなら、必ず道に迷ったことでしょう。しかしダビデは主だけに頼ったから、迷うことはなかったのです。彼は断固とした態度でみことばに頼りました。「**あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。**」（詩篇119・105）　そして、目的地に達するまで、主は毎日必ず必要なものを与えてくださいました。私たちが淋しくなる時、主は恵みをもって迎えてくださり、あふれるばかりの愛を注いでくださいます。ダビデはある時、姦淫の罪、殺人の罪を犯してしまい、嘘をつきました。人間は罪を隠すことによって悲しく、孤独になります。でも、どんなに孤独な道を歩いていても、主は愛をもって迎えてくださいます。私たちが罪を告白し、罪を捨てるなら、主は赦してくださいます。そして、赦されたことを知って、私たちは喜びます。私たちはまた、苦しみや悲しみを通しても主の慰めと励ましを体験するようになります。すべてのことを主の御手から受け取る者は、主の十字架の勝利を体験するようになります。主はいつも私たちの近くにおられ、導いてくださるお方です。過去に歩いた道、現在歩いている道、これから歩く道がどのようであっても、主を呼び求めれば、主は恵みをもって私たちを迎えてくださいます。「**わたし（主）の恵みは、あなたに十分である。**」（2コリント12・9）私たち自身も、私たちの時間でさえも、主の御手の内にあるのですから。

主よ。あなたの道は最善です

（11月11日　国際福音センターにて）

ピラトはイエス様に聞きました。「**あなたは、ユダヤ人の王ですか。**」イエス様は答えられました。「**そのとおりです。**」（マタイ27・11）

また、イエス様は言われました。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。**」（ヨハネ14・6）　この世の支配者は、人間に要求します。それで私たちの心は疲れ果てます。ところがイエス様は、「**疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。**」（マタイ11・28）と呼びかけ、そのままの私たちを受け入れてくださるお方です。私たちは、いろいろな所で働いています。でも、大切なのは、私たちを動かす力が何であるかです。私たちは上司や同僚と協調すべきですが、問題はそれを行なう動機、心構えです。妥協せずに主に従うことが大切です。私はアイドリンゲン神学校に入った時、卒業したら姉妹会に入りたいと望んでいました。でも、とてもそれが許される環境ではありませんでした。母が重病で、近くに住む必要があったからです。私は「主よ。あなたさまのみこころを明らかにしてください。私はあなたさまのそばで働きたいのです」、「私のすべてをあなたに捧げます。私を器としてお用いください」と祈り続けました。主は答えてくださいました。アイドリンゲンの姉妹会に入れるようになったのです。両親もこの決心を喜んでくれました。私はその後、がんになり、主のお考えはどこにあるのかと思ったこともありました。「主よ。あなたの道は最善です。あなたのみこころだけがなりますように」と祈ることは、絶えることのない心の戦いです。9年前に手術を受け、9カ月療養した後、アイドリンゲンに戻り、再び主にお仕えできることは大きな喜びです。「主よ。あなたのためにだけ生きたい」と心から望んでいます。死を克服してくださった主に頼れば、ダビデのように「**死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。**」（詩篇23・4）と言うことができます。私たちは死後もいつまでもイエス様といっしょにいることができると確信しています。これこそがほんとうの幸福ではないでしょうか。



主を求める人々であふれる家に

Schwester Helene Sorg　シュベスター・ヘレーネ　70歳　（11月14日　神楽坂家庭集会にて）

私は、定年後の主を愛する二人の姉妹と共に、フォーヨーバッハという町に住んでいます。

この家は5年前にムッターハウスを通して主に捧げられた家です。最近、ご近所の方々が次々に主に導かれています。なぜならこの家の前の持ち主は「この家が主に用いられますように」と、天に召されるまで心から祈っておられたからです。ご近所の方々は、主に対して心を開くようになり、真剣に聖書のみことばを聞くようになりました。この家の前の持ち主の祈りは聞かれたのです。動くこともできない偶像の神々のようにではなく、私たちの生きておられる主イエス様は、祈りを聞いてくださるお方です。私たちはもっともっと祈り続けたいと思います。この家が主を求める人々でいっぱいになるようにと。



主に頼るとすべては可能になる

Schwester Ruth Schaible　シュベスター・ルツ　63歳　（11月13日　吉祥寺集会火曜学び会にて）

36年前、アイドリンゲン姉妹会に入るとき主に約束しました。「どんなことでも、それを命じておられるお方、支配者であるお方の言葉に従います」と。どんな小さな仕事でも、この心構えで、主の御手から受け取ることによって、喜んでできるし、祝福されることを体験しました。私は細かいことが苦手で、お客様の準備などがきちんとできない性質でした。でも主に頼ると、主が成し遂げてくださり、いっしょに働くための一致を与えてくださいます。素直に主に信頼し従うことは、全生涯を通しての問題です。私はいつも祈っています。「若い方々が主を心から愛し、みことばが好きになるように」と。また、「私たちの内に住むイエス様はすべてを変えられるお方だと知っていただきたい」と。私たちの力ではできなくても、主に頼るとすべては可能になります。



罪の赦しを確信できれば見方が変わります

Schwester Gisela Kehn　シュベスター・ギゼラ　63歳　（11月14日　神楽坂家庭集会にて）

40年間、子供たちの施設や病院で働き、今年の6月からミヘルスベルグで働いています。父は戦争中にソ連で亡くなりました。私は小さいころから「天国に行けるだろうか」と心配していました。また、ある時まで、「教会で聖餐を受ければ罪は赦される」と信じこんでいました。でも、聖餐を受けてもその確信はありませんでした。14歳の時、次のみことばが大きな慰めになりました。「**たとい山々が移り、丘が動いても、私の変わらぬ愛はあなたから移らず、私の平和の契約は動かない。**」（イザヤ54・10）このみことばによって、主を身近に感じるようになりました。ある家族の招きで特別集会に行き、イエス様が私の罪のために死なれたことをすなおに受け入れることができました。その後、ある若者の集会で、「**主は近いのです。**」（ピリピ4・5）というみことばによって、「主のために生きたい。主にお仕えしたい」と思うようになり、アイドリンゲンに入る決心をしました。私たちは、自分の将来について、「罪が赦されていること。行く先は天の御国であること」を確信すれば、前進することができ、見方も変わるのではないでしょうか。



主は決して私から離れられない

Schwester Hanna Brandt　シュベスター・ハンナ　57歳　（11月13日　吉祥寺集会火曜学び会にて）

私は30年間、姉妹会で聖書を伝え、若い方々のための修養会をやってきました。12年前からアイドリンゲンのムッターハウスに戻り、グラフィック・デザイナーとして働いています。私は主を愛する両親のもとで、14人の兄弟姉妹の一人として育ちました。

「**わたしがあなたを贖ったのだ。……あなたはわたしのもの。**」（イザヤ43・1）というみことばを通して主のもとに導かれました。それから私は、主が忠実なお方であること、どんな時にも私を守ってくださるお方であることを体験し、確信することができました。私が弱い時にこそ、主は強くあられ、決して私から離れず、今日までを導いてくださいました。



主が成しとげてくださる

Schwester Emilie Bulling　シュベスター・エミリエ　70歳　（11月13日　吉祥寺集会火曜日学び会にて）

私はベックさんの妻ミンヘンの妹です。三人の兄弟姉妹と共に、イエス様を信じ、愛する両親のもとで育てられました。12歳の時、「**恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。……あなたはわたしのもの。**」（イザヤ43・1）というみことばを通して主を個人的に知るようになり、16歳の時、主のお召しを受けていることを確信し、アイドリンゲンの神学校に入りました。「**主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。**」（詩篇37・4、5）　このみことばは、それからの私の人生の土台となりました。主は私のわがままな願いを満たそうとはなさらず、主に信頼し仕える喜びを体験させてくださいました。主は忍耐強く、恵み豊かに導いてくださるお方です。この主が再び来られる時まで、目を覚まして主を仰ぎ見、主のために働きましょう。主は忠実で真実なお方です。主に信頼すると、感謝し、喜ぶことができます。



「従う」ことは、私にとって「幸福」

Schwester Gudrun Disch　シュベスター・グッドルーン　57歳　（11月10日　西軽井沢喜びのコンサートにて）

ミヘルスベルグで5年間、主に仕えています。それまでの13年間はイスラエルで、迫害されたユダヤ人のために働きました。最初はキルヒハイムの看護婦学校で学び、ベックさんの娘のリンデさんが入院していた病院で働きました。私が最も驚いたのは、リンデさんが平気で「死」について、その先にある将来について、周りの人々に話していたことでした。リンデさんの葬儀は、私にとって忘れられないものでした。それまでの私の人生は、まったく目的のない人生でした。でも、いつかは本当のものを見つけられると思っていました。今までの人生を振り返ると、主の導きは最善だと思わざるをえません。私が主を求めようとしなかった時、主は私を探していてくださったのです。それはドイツではなく、スイスでおこりました。私はその時、主と結びついていなければ、もはや生きてはいけない、と認めざるをえなくなったのです。もう、祈りしかありませんでした。「主よ。助けてください！」。その時、主は私に語ってくださり、祈りが聞かれることを体験したのです。そして、イエス様と出会うことによって、すべてが変わりました。主は**「私に従いなさい。」（ヨハネ21・19）**と呼びかけられました。それ以来、「従う」ことは私にとって「幸福」を意味するようになりました。アイドリンゲン姉妹会に入ってから、26年たった今まで、1秒も後悔したことはありません。父なる神は、私の必要なものを与えてくださるお方です。たとえ壁にぶつかったとしても、主ご自身が道をつけ、すべてを解決してくださいます。主よ。すべての富はあなたのものです。主にすべての栄光が帰されますように。そしてそれを体験的に知る時、私は心から喜んで主をたたえます。



いつまでも主にお仕えしたい

Schwester Adelheid Bross　シュベスター・アーデルハイド　60歳　（11月14日　神楽坂家庭集会にて）

主の恵みで日本にまいりました。私の母は戦争で父を亡くし、私たちを育てる苦労の中でイエス様に出会い、頼る者になり、子供たちにも主を伝えました。母に勧められてフィーリンゲンに導かれ、そこにいた2年の間にイエス様を救い主として受け入れました。**「宝をちりの上に置き、オフィルの金を川の小石の間に置け。……そのとき、あなたは全能者をあなたの喜びとし、神に向かってあなたの顔を上げる。」（ヨブ22・24、26）**　このみことばが私の人生の土台となり、**「主が贖い出されたことを覚えていなさい。」（申命記15・15）**によってアイドリンゲン姉妹会に導かれたのです。これらのみことばを思い出すと、どんな時でも元気になります。主のご計画は必ず成ります。いつまでも主に仕えたいとねがっています。



「わたしの愛の中に とどまりなさい」

Schwester Elsbeth Bischoff　シュベスター・エリスベート　62歳（11月10日　国際福音センターにて）

私はミヘルスベルグに住んでいます。そこで多くの方々にイエス様をご紹介できることは大きな喜びです。19歳の時、英語を学ぶためにイギリスのクリスチャン・フェローシップセンターに行き、そこで私は「主イエス様が私のために死んでくださった」という福音を知りました。半年間、集会や祈り会に参加し、主の祝福を受けました。その後ドイツに帰りましたが、親しく語れる信仰の友もなく、いつしか主の救いすらも疑うようになり、苦しみぬきました。自分の力に拠り頼んでいたわたしは、再びイギリスに行き、そこでウォッチマン・ニーの本を読み、「イエス様は私のために死んでくださった」だけでなく、「私の内に住んでくださるためにも、死んでくださった」ことを初めて知りました。「私の内にイエス様が生きておられるなら、もう何も心配する必要はないし、自分でがんばる必要もない」と確信することができました。そして主は、私の中の罪を明らかにしてくださり、悔い改めることができました。ほんとうにイエス様は何でもできるお方だと知りました。そして、ドイツにあるアイドリンゲン姉妹会のことを知り、そこに導かれました。それから長い月日が過ぎましたが、今も主によって見出されたことを喜んでいます。そしてもっともっと、イエス様のことを知りたいと思っています。**「わたしの愛の中にとどまりなさい。」（ヨハネ15・9）**　愛の中にとどまることと、自分勝手に歩まないことは、私が最も大切にしていることです。**「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」（ヨハネ15・5）**　何があっても、どのような状況にあっても、イエス様に助けを求めることができ、頼ることができるとは、何という恵みであり喜びでしょうか。すべてのことを主の御手から受け取り、すべてを主にゆだねることをもっと学びたいと願っています。**「あなたはわたしのもの。」（イザヤ43・1）**

このみことばは、私がアイドリンゲン姉妹会に導かれたとき主からいただいたみことばです。そして主は、今もすべての方々に、同じように呼びかけておられます。



シュベスターのみなさんの制服を作って

Schwester Magdalene Haug　シュベスター・マグダレーネ 66歳　（11月14日神楽坂家庭集会にて）

初めて日本に来て、感謝しています。24歳の時、両親はアイドリンゲン神学校に入ることを許してくれました。卒業後、看護学校に進み、病院で4年間働いた後、ムッターハウスで4人の姉妹たちと、360人もいるシュベスターのみなさんの制服を作っています。36年も同じ仕事をしてきましたから、時には感情的になったり、ぶつかったりもしました。そんな時、自分で考えずに、主に祈れることは大きな恵みです。主は必ず答えてくださるからです。**「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」（ヘブル12・2）**。「わたしはあなたを助ける。」と、主は語ってくださり、いつも必要な助け、必要な一致を与えてくださいます。どんな時でも主に信頼するとうれしくなり、主は祝福してくださるのです。



私は主のために生きたい

Schwester Marianne Wolfer　シュベスター・マリアンネ　76歳　（11月10日　国際福音センターにて）

私の名前マリアンネは、「苦い経験を通して主の恵みをいただく者になった」という意味で、私の人生そのものです。母と姉は私の救いのために祈り続けてくれたのですが、私は反発し、21年もの間、自分のことだけを考え、わがままな道を歩きました。1948年の秋、主を信じている友達によっていっしょに主の前に祈るように導かれ、私はその瞬間、「主はありのままの私を受け入れてくださり、罪の中に死んでいた私を十字架の死によって救ってくださり、そして私は永遠に捨てられないのだ」と確信しました。そして私は内面的な自由、真の喜びを得たのです。母の21年の祈り、主のあわれみの結果でした。母はさらに私を、主を宣べ伝える者として成長させるために、毎朝私と聖書を読み、祈るようになりました。それは私自身の罪の姿を私に見せるためでした。ダビデのように、すべての罪を主の光の前に出して祈ることができました。その後、アイドリンゲンの特別集会で証しをし、主を喜ぶ者と変えられたのです。1949年の初め、**「生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」（ピリピ1・20、21）**に出会い、その日熱い祈りの戦いの後に、「私はあなたのために生きたい！」と涙で祈ったのです。その時、私は確信しました。「主は今から私を祝福してくださる。やがて私が召される時、言うでしょう。主よ、あなたは私を豊かに祝福してくださいました、あなたを知ったことは、最高の幸せでした」と。その年の春アイドリンゲン神学校に入り、聖書の中心であるイエス様ご自身をさらによく知ることができました。その後、アイドリンゲンの創始者クリストファー・リーバーン姉の秘書として働くようになりました。現在、ムッターハウスが年に4回、70カ国に訳されて発行されているBIBELLESEZETTEL（日々のみことば集）の制作委員の一人として働いています。日本に来る前に、仕事が錯綜し、主は祈りをすべて聞いてくださり解決へと導かれたことを体験し、おおきな祝福をいただきました。黙示録5・12のみことばのように、主が永遠にほめたたえられますように。

ここではご紹介できませんでしたが、これらの方々の他に、次の方々も来日されています。



Schwester Gerda Reichert
シュベスター・ゲルダ　64歳



Schwester Annemarie Krempel
シュベスター・アンネマリー　55歳



Schwester Karin Behrens
シュベスター・カリン　37歳

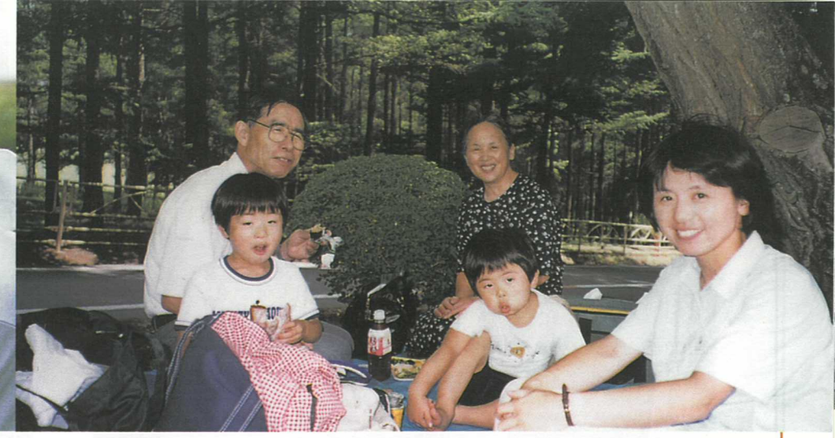
試練は神のご計画、恵みでした

勝野　美幸

1965年長野県生まれ。岡谷東部中、岡谷東高、上越教育大学卒。原小学校教諭。
家族は祖母かづ江さん、母洋子さん、弟幸一さん、長男喜大さん、次男真信さん。



3年前、父 貞義さんと孫の喜大さん。畑にて



左から、父 貞義さん、長男 喜大さん、母 洋子さん、次男 真信さん、美幸さん

わが家は、短期間に全員が救われて、クリスチャン・ファミリーとなりました。まず1992年7月に父方の祖母かづ江と母洋子、次いで10月に私、12月に父貞義、翌年1月に弟幸一が、それぞれイエス様に祈る者とされたのです。その後、94年8月に祖母と私、96年8月に両親と弟が洗礼を受け、家族で聖書を拝読し、主に語りかけるという祈りの恵みをいただくようになりました。重い病、仕事のこと、家庭の問題など、人間の力ではどうにもならない、とりわけ自分の力ではどうにもならない試練に遭遇してのことでした。すべては主のご計画によるものであった、と思います。

目に見えることへの挫折から、目に見えないものが見え、感じられ、信じることができるようになりましたが、これも受洗後に与えられた試練、課題の一つ一つを通して、心の中に、泉の水がわくように、少しずつ少しずつ潤いが与えられていったことによるものです。

今回、父の不治の病を通して、それは、より鮮明にされました。現代の最高の医学をもってしても、どうにもならない心臓の癌を突然、与えられたことにより、「主は、生きておられる」ことを確かなものとしてくださいました。

父は、他人から「元気そう」と言われるほどに、家族の者にも痛いとも苦しいとも言わず、そういう顔もせずに過ごしていました。しかし、昨年来、書き綴っていた日記からは、身体的に辛かったことが伝わってきます。そこには「イエス様、早く（迎えに）来てください」の呼びかけが、いくつもいくつも綴られていました。

そして、日記の終わりの方には、家族一人一人に宛てた手紙が書かれていました。それぞれの手紙には、父が自分の罪と認める事柄の一つ一つが綴られ、その一つ一つに「ごめんなさい」が添えられていました。「ありがとう」が添えられていました。主への悔い改めと、感謝と祈りにあふれた手紙であり、日記でした。父のすべてが、イエス様という光の中にさらけ出されていました。

最善の時に天国へ召してくださった

聖書は、人は病によって死ぬのではなく、主のみこころに叶った時が与えられて、最善の時に天国へ連れて行ってくださる、ということを語っていますが、父の召天を通して、そのことを、この目で確かめることができました。

2001年12月14日――その日は、朝から父の様子がおかしいということで、看護婦さんや担当の先生が小刻みに病室を訪れ、チェックをしていかれました。夜8時近く、それまで付き添っていた私と交代するため、保育園に通う二人の子どもを迎えがてら母と弟が到着し、家族全員が病室にそろいました。「じゃあね」と父に握手して帰ろうとしたその時、それまで意識がなく、閉じたままの目が、かすかにすーっと開きました。機械によって、かろうじて整えられていた呼吸や脈拍の数値に変化が見られました。

母はありったけの声で「お父さん、愛をありがとう」と話しかけていました。弟は主に向かって祈りました。私は祈ることも呼びかけることもできず、「賛美をしよう」とだけ提案しました。聖歌655番「主がついてれば」、656番「わたしのように」、222番「つかれしものよ」を全部歌い終えたとき、機械の数値が消え、波打っていた線が平坦になりました。

機械の数値が消えたことは、肉なる体をむしばんでいた腫瘍に、身体の器官が覆われたことによって、命が絶たれたことを示している、と解釈できるかもしれませんが、そうではないことをはっきりと感じました。

命は絶たれたのではなく、機械の数値が消えた瞬間、父のすべては、人の手によらぬ神様の域に達しました。聖霊に満たされきった瞬間でした。人間の力、自我で成そうとすることの、おごりという名の罪がすべて砕かれたとき、主の力も完全に働かれるのですね。「完了したよ。」とイエス様が、やさしく父の体を抱き上げてくださっているのが見えるようでした。父は、主イエス様によって永遠の命を与えられました。

看護婦さんも担当の先生も、私たち家族と共に、賛美のときも祈りのときも、ずーっとそこにいてくださいました。本当にあたたかく静かで、すばらしいひとときを与えていただけたことに感謝でした。

自然に触れた父との日々

父は私や幸一が幼いころから、自然と触れ合う機会をたくさん与えてくれました。休日の朝、散歩に出かけて野の花の名前を教えてくれたり、サイクリングで風をいっぱいに受けて走る心地よさを共に味わったり、山へドライブして野鳥の声を聴かせてくれたり、星図を手に夜空を眺めたり、八ヶ岳山頂で雲海の中の朝を迎えたり…。とくに川へは、よく連れて行ってくれました。中学で理科を教えていた父は、川に住む水生昆虫の種類や数と水質との関係を調べていました。

このような父との日々の中で、無意識のうちに、自然への愛着や畏敬の思いが育まれたのだと思います。いつしか私の心の中に、見えないけれども確かにあると実感させてくれる宇宙の息づかい、神様の存在、を感じ取る素地が芽生えたようでした。

父はクリスマスには必ずサイレント・ナイトやジングルベルを、かたかな英語で歌ってくれました。その歌声はいまでも耳の奥の方で聞こえてきます。小さいころは、「花や羊と話した少年」というお話の登場人物に過ぎなかったイエス様でしたが、たとえ形だけで迎えたクリスマスであっても、父がクリスマスを大切に考え、ロウソクの火の下に家族そろってケーキを食べるという、楽しく暖かい空間をつくってくれたことは、忘れられない、すてきな思い出です。その空間の心地よさがあったからこそ、のちにイエス様を神の御子と素直に認め、信じるのに、理屈と時間を要しませんでした。

こういうひとこま、ひとこまも、主が遠い遠い昔から備えてくださっていたものだと思われます。

そして、確かな備えが「祈り」にありました。家族が、つぶやいたり不安を覚えたりして、祈れない日々もありました。けれども、そうした信仰の弱さを、主は赦してくださいました。主は、共に祈る多くのキリスト者を備えられることによって、支えてくださいました。その祈りの一つ一つが聞き届けられ、父は無事、天国行きの列車に乗って、御国へたどり着くことができました。祈りが、「イエス様」と呼びかけることが、賛美を捧げることが、何ものにも勝る力となり、支えとなることを身をもって覚えました。感謝でした。

この証しは父、貞義さんの葬儀（2001年12月17日、諏訪市えこうホール）で語られたものです。葬儀では貞義さんの証しとして、日記の一部が読まれました。

勝野貞義さんの日記から　（原文のまま）

2000年10月4日　　退院してから一ヶ月とたたないうちに再入院とは早過ぎ?とまで思う程。しかし、これも主の御計画です。退院時、ライブラリーをもう少し整理したり、山の方も…と思っていたが、今となってはどうしようもない。イエス様、御免なさい。家族の皆さんにも、至らぬ夫、父、祖父、子供であったこと心からお詫びします。御免なさい。悔いることの多いことが沢山ありましたが、愛するイエス様、信仰によって罪が許され、全てをイエス様におゆだねし、心が平安の内に、生活できたことを心からイエス様に感謝します。（中略）どのようなことがあっても、主により頼み（自分でなく）、祈り（み心は何か）、聖書は何と言っているか、共に考えあってその中に生き方を見つけて下さい。人間は必ず一度死ぬ（肉において）。しかし時間のちがいで、すぐ会える。私達の国籍は天にあります。

12月22日　　愛する洋子様へ　　結婚以来、苦労（の連続）かけばなしで、本当に申し訳ない。家のこと（二軒持つことになったこと）、子どもをおろしたこと、子供の教育、両親の面倒　etc.　並みたいていなことでない。…いろいろ相談することなく多くのことを決め、勝手に生きてきた。従って、多くの生徒や父兄、親せきの方々にも迷惑をかけてしまい申し訳ないと思っている。(中略)こんな罪人ですが、お許し下さい。愛するイエス様は、これ等の私の罪を許して下さり、（私の罪のために死んで下さり）感謝しております。

伊那集会、全国の集会、インターネットを通したり、多くの兄弟姉妹のお祈りに支えられてきたことを感謝します。

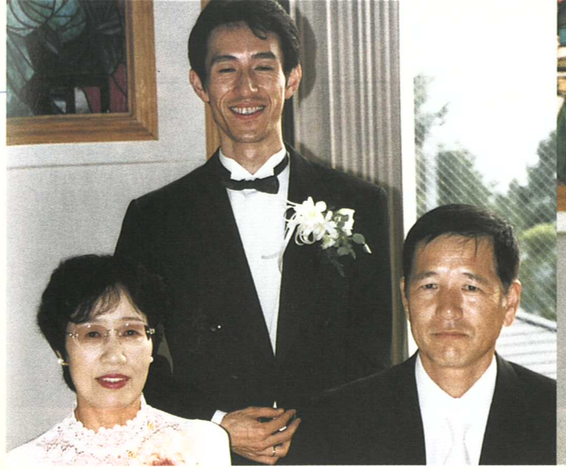
何回もの入院に、根気よく足を運んでくれ、自分のわがままを聞いてくれ、ありがとう。毎日呼吸している空気と同じように、感謝が足りなかった。気付き、思いやり…に欠ける人間失格者であったことを思う。イエス様を紹介されてからも、恥ずかしい聖書の読みとりしかできなかった。今生かされているのは、イエス様の真理をもっとよく知ってからにしなさい、と待ったがかかったのかも…（中略）みことばが家族を救い、今、自分が生かされ平安のうちに生活できていることを感謝します。

結婚披露茶話会（2001年7月28日、西軽井沢国際福音センター）での証しから

いずみちゃんは、「はい」と言ってくれた。

森崎剛

1972年広島市に生まれる。伴中、沼田高、広島電機大学電子工学科卒。
（株）システムクリエイト社勤務。家族は妻いずみさん。



ご両親と。



結婚式で証しする剛さん。

先ほどハレルヤコーラスを歌っていただいて、涙がでてしまいました。先週、福岡のメサイヤ公演で、私も歌わせていただいたんです。主を賛美することは、ほんとうにすばらしい!

妻いずみちゃんとの出会いは、1996年2月、友達とスノーボードに行ったのですが、友達の奥さんが、いずみちゃんを誘ってくださったのがそもそものなれ初めです。何回かデートをしてもらい、いい感じだなと思ったので「つきあってもらえませんか」と言いました。しかし、いずみちゃんに、「イエス様を知らないし、今集っているキリスト集会に、好きな人がいるから」と断られてしまいまして、その後気持ちがおさまるまで1年ぐらいもかかりました。

しかし、気を取りなおし、いずみちゃんの誕生日にさりげない手紙を書いたり、いずみちゃんが仕事をやめて実家に帰るとき、CDを貸して、次に会うきっかけをつくったりしました。CDを返してもらうときに、まあだめだとはわかっていたのですが、自分の気持ちにけじめをつけようと思って「結婚したい。好意のおしつけになると思うけど、自分の気持ちだけは言っておこうと思う」と言いました。しばらくして、手紙が届きました。「好きだと思うし、結婚したいと思うけど、イエス様を知らないからだめ」と書いてありました。ぼくの予想では、そんな返事が返ってくるとは思いませんでして、「ただの友達ぐらいに思っているのかな」と思っていたので、「それはないだろう。どうしろというのだ」とムカッときて、会って話したいと思い、返事の住所をたよりに、大分まで会いに行きました。そして、「知りもしないでイエス様を否定するのはいやだ。どんなところか、キリスト集会につれてってくれ」と言いました。

聖書って何か。イエス様って何か。それを判断するには、一通りの催しに出てみなくてはと、去年の8月頃から誘われるままいろいろな集会に出てみました。集会で自己紹介のとき、さすがに「好きな人が来ているから来てみました」とも言えず、「聖書に興味があるんです」なんてあいさつをしていました。そうこうしているうちに、いずみちゃんから、聖書をもらいました。手紙には「押しつけで負担に思われたら、捨ててください」と書いてあり「この子は何て事を言うんだ、あなたからもらったものを捨てられるわけないだろう」と思いました。どんなことが書いてあるのか読んでみようと思いました。しかし、どこから読んでもさっぱりわからず、途方にくれていましたら、ある方から、聖書の入門書を紹介され、少し助けになりました。

だんだん聖書を読むのが楽しく思えるようになった頃、この楽しさは本当に自分の思いなのかと悩むようになりました。聖書を読むと確かに楽になった気がする。集会に集うのもいやじゃない。でもそれは、いずみちゃんを目的としているんじゃないか?と。「わからない」と言っていたら、ある方から「わかるようにしてください」とイエス様に祈ればいいと教えられました。寝る前に聖書を読むのですが、「ぼくには、さっぱりわかりませんが、わかるようにしてください」と祈ってから、聖書を読むようにしました。何だか、少しわかったような気がしたんですが、きっと気のせいだと思います。やっぱり神様の考えていらっしゃることは、ぼくなんかじゃわからないことが多いです。いずみちゃんに対してもそうですが、うそをついて自分を偽るのはいやだ。本当に自分が神様を必要としているのか。本当に神様をもっているのかわからないと自分に問いかけました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ29・11）

この聖句が目に止まりました。すべてを造った神様が立てている計画は、わざわいじゃなくて、希望を与えてくださるためだ。じゃあそれを信じてみるか、という気になって、そこで少し気分が落ち着いたのを覚えています。

10月末、徳山の池永さんという、脊椎麻痺の方のお見舞いに行きました。20数年ベッドの上で寝たきりの生活をしておられるのに、幸せそうに喜んでおられて、私の方が逆に励まされてしまいました。帰り道思いました。「あの人は、何であんなに幸せそうなんだろう。何がそんなに彼を幸せにしているんだろう。ぼくは何で幸せじゃないんだろう」と。そして「いずみちゃんが信じているからということではなく、自分自身は、どうなのかをよく考えたいので、しばらく連絡するのはやめる」とメールを出しました。自分が「いずみちゃんに認めてもらいたいためだけに、私は主を知っているふりをしているんじゃないか」という葛藤がまた頭をもたげてきて、私を悩ませました。

そのころ集会のある方の家に誘われました。すごく行きたくなかったのですが、イエス様が備えてくれたんだったら、何か意味があるかもしれないと思い直し、少し遅れて行きました。そのときある方が、「信じるか信じないかは、生き方の問題だから、信じる道を生きるか、信じない道を生きるか、それは自由です。疑いだしたらきりがない。だけど信じて生きると決めたら、そういう生き方をすればいいのです」と言ってくださいました。そのとき、うだうだ悩むのはもうやめて、主に従って生きていこうと決心しました。

11月、御代田で結婚式があるから行ってみないかと誘われました。御代田の福音センターに着いて、いずみちゃんの後をうろうろしていたら、小人数でベックさんとお話する集いがあったのです。少し私のことを話したら、ベックさんが、「神に祈りを捧げるというのは、もうすでに救われているんだよ」とおっしゃいました。「自分はよくわからないけど祈っている。だから、もういいんだ」と思いました。それから洗礼式を見に行きました。「あなたも受けてみれば」と軽く言われました。「そんなに簡単なものなのか、私なんか、聖書の知識も乏しいし、何か勉強して段階を踏まなければいけないんじゃないか」と、今考えれば、ばかな話ですが、心の中で思いながら、まわりの方にすすめられ、自分でも拒む理由もないし「ま、いいか」と思って急きょ洗礼を受けました。洗礼を受けてどう変わったわけでもないのですが、顔が別人のように、にこやかになったといわれます。

御代田から帰ってから、「もう洗礼も受けたし、いいだろう」と私が言うと、彼女は当然「はい」と言ってくれました。私は、心のどこかでこのいずみちゃんの「はい」という返事をもらいたかったんだなーと思いました。そして、熊本でのよろこびの集いのとき、プロポーズしてしまいました。ついでに、結婚式の場所と日どりまで決めてしまったものですから、帰ってから親に、そうとう怒られました。ぼくは広島でいずみちゃんは大分ですから無理もないことでした。が、それでもやっぱり御代田の地で式を挙げたいと思い、新年のよろこびの集いに、結婚の報告を兼ね、御代田の福音センターに来ました。そして、喜びのコンサートの最後のときでした。メサイヤのアーメンコーラスで、感動してしまい、隣にいずみちゃんがいるのに「かっこわりー」と思いながらも泣きまくりました。こんな私でも主は、「わかっているからそのままでここにいなさい」と、すべて赦してくださったような気がして、涙がとまりませんでした。集会のみなさんのコーラスに、すごく感動して、「主によって包まれた」という感じがして、「ぼくも歌いたい」と思ったんです。それが、先週本当に歌うなどとは、そのときは思いもよりませんでした。「私のようなこんな者でも、歌っていいんだ!」　主を賛美する喜びを体験することができました。言葉では言い表せられない感謝でした。

今思うことは、「主のなさることは、最善」。これが真実であることを、私は胸を張って言えます。

あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。（エレミヤ29・12）

私は本当に心を尽くして祈っているのかと疑問もありますが、こんな私の祈りにも、主は答えてくださいました。主の恵みを、ことばでは言い表せないくらい感謝しています。これからはいずみちゃんといつも主に祈り、これからの人生を歩んでいきたいと思います。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ29・11）

結婚式の前に、ヨハネの黙示録を読んでいたら、こんなすばらしい備えをしてくださった主に感謝でいっぱいで、涙がとまりませんでした。

主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。（黙示録22・21）

結婚披露茶話会 (2001年7月28日、西軽井沢国際福音センター) での証しから

けんかをしても、主には謝れます。二人とも

森崎いずみ

1975年福岡県に生まれる。北部中、四日市高、広島赤十字看護専門学校卒。
広島赤十字原爆病院産婦人科、三保診療所（大分県中津市）など勤務後、2001年森崎剛さんと結婚。

私は福岡で育ちましたが、両親は教会に通っていました。イエス様のお話は小さいときから聞かされていましたが、イエス様なんて物語の人物だと思っていました。よく「神様が見ているよ」と叱られたので、見えないけどじっと監視している怖いお方、と思っていました。日曜日ごとに教会にいくので、学校の友達と遊べないことも不満で、クリスチャンホームであることが嫌いでした。少し大きくなって聖書を読むようになったときも、「あらすじを知っている新鮮味のない本」のように感じていました。私はうわべだけのクリスチャンで、真の信仰からは遠い状態でした。

そんな私がイエス様と出会ったのは、8年前、故郷を出て広島の看護学校に入ったときでした。

見知らぬ土地で他人との生活。6人部屋の寮は教室と同じ建物でした。厳しい実習と寮の規則、膨大な授業内容。いつも息苦しく、逃げ場もなく、精神的に追い詰められていきました。ほとんどの学生は地元の出身で,週末ごとに帰宅します。大分県から出てきた私には、それができません。

どうして、こんな遠い所へ来てしまったんだろう。一人ぼっちで寂しい。一緒にいてくれる親友がほしいと、どんどん落ち込んでいきました。

私は幼い頃から、家族や友人の中にいても孤独を感じることが多く、私のすべてを受け入れてくれる人を求めていました。でも、そういう人は見当たらず、いつも絶望を感じ、人の口で自分が傷つくことを恐れていました。それでも家族と暮らしていたときは、なんとかまぎれていたのですが、家から出たことで、その孤独と向き合うことになりました。人とうまくやっていけない自分を変えようと、牧師さんのカウンセリングを受けてみたり,奉仕活動をしたり、あれこれとやってみました。しかし、何一つ変わらず、かえって人をうらやみ、惨めな気持ちになるばかりでした。すべてがむなしく、ますます無気力になっていきました。

そんな絶望の中にあって、両親だけは何があっても私を見捨てず、最後には助けてくれるはず、と思っていました。ですから、その両親に「あなたのためには祈ることしかできない」と泣かれたとき、ああ親にも見捨てられた、どん底に突き落とされたと、早まった気分になりました。

しかし、なんとも不思議なことですが、その絶望の直後に救いが訪れたのです。

それまで私は、親に見捨てられたら気が狂い、死ぬしかないと思っていたましたが、そのときは、なぜか絶望はしていてもパニックにはならず、心静かでした。そして聖書を開いたとき次のみことばが目にとまりました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29･11）

もしかしたら、今のどん底は主が平安を与えてくださるためのご計画かもしれない、と思いました。みことばが心にひびき、次の瞬間、このみことばにすがりたい、体験したい、でないと生きていけない、こう心の中で叫び続けていました。そのうちに、なにか勇気と希望のようなものがわいてきたのです。

その頃から、すべてのものの上にイエス様がおられ、どんなことがあろうとも最善をなしてくださるのだ、という何とも言えない安心を感じるようになりました。人間関係も楽になり、周りから「明るくなったね」と言われました。聖書のみことばとお約束は真実でした。みことばへの信頼に欠け、いい加減に聖書を読んでいた不信仰を恥ずかしく思いました。イエス様、本当にごめんなさい。そんな私を見捨てず、忍耐を持って見守っていてくださってありがとうございます。

かつての苦しい日々は、目に見えない永遠で真実の親友、イエス様に出会うために必要な試練でした。そのために,目に見える支えと希望を失う体験が、私には必要でした。主イエス様が一方的に、私を捕らえるために追い詰めてくださったのでした。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119･71）

イエス様は、私がいい人であるとか、何かができるとか、頑張っているから愛してくださるのではありません。だめな私を、「わたしがあなたをそのように造ったのだから、そのままでいいよ。わたしにとってあなたは尊い宝物だよ」と全面的に受け入れてくださっています。それなのに、自分を変な努力で変えようとしたことは、イエス様を悲しませるだけでした。だめだから、できないから主に頼るのです。イエス様もそれを望んでおられる、と今は言うことができます。今でも落ち込むことの多い者ですが、このままで私を受け入れてくださるイエス様を思うと、うれしくてたまりません。私の中の孤独という空洞は、イエス様によって完全に埋められました。

結婚についても、主はすばらしいことをしてくださいました。私は結婚はしたいけれど、できないだろうと思っていました。結婚相手はクリスチャンでなければいけない、と思いながら、惹かれる男性は未信者ばかり。クリスチャンの男性は少なく、結婚したいと思える方も見当たらない、それに礼拝に行く場で異性に関心を持つのはよくない、と思いこんでいました。

結婚する友人を見ると、うらやましいと思いました。クリスチャンでなかったらもっと楽で自由に恋愛できただろうに。だめだと知りながら、なぜ好きになるのだろう。苦しい。未信者はだめというなら、クリスチャンなら好きでなくてもいいということか。交際するうちに相手が救われるケースもあるけれど、逆に相手にひきずられて私が主から離れることにならないか。あるいは信仰を押し付け過ぎて、その人は主からも私からも離れていくんじゃないか。信仰を押し付けず、でも主を第一として付き合っていく忍耐は私にはない。結婚への憧れと失望,主への不満と罪意識などで、ずっと悩んでいました。

このようなとき、森崎剛さんと知り合いました。剛さんは同僚の方の友人で、5年前のことでした。同僚の方は、私がクリスチャンとしか付き合わない、と彼に言っていたようで、その後2,3度会いましたが、気の合う優しいお兄さんという感じでした。そして3年前、同僚の結婚式で久々に再会し、それから数回お目にかかるうち、彼から「付き合ってほしい」と言われました。しかし、その頃、同じキリスト集会の方との交際を考えていて、お断りしました。そして昨年、私が退職して大分に帰るというとき突然、剛さんから手紙をもらいました。「断られたことは今でも辛いけど、気まずいまま終わるのは嫌だから、いい友達として帰る前に一度会ってもらえないか。誕生日だし、広島も最後だから行きたい所へ連れて行ってあげるよ」と書かれていました。

一度はっきりお断りしたのに、どうしてこんなに優しくできるのだろう。私なら二度と会ってやるものか、と思うのに。もしかしたら、主が剛さんを救いたくて、このことを起こしたのではないか。こう思った私は、その時から彼の救いを祈り始めました。

こうして剛さんと会うことになり、その後、イエス様のことをお話したり、聖書をプレゼントしたりしました。でも、剛さんがイエス様を信じるようになるかどうか分かりませんし、はっきり好きだという思いにもなれず、結婚のことは彼が救われてから考えよう、と思っていました。剛さんにも「信仰を押し付けたくないので、拒んでもいい。ただ私は同じ信仰の人と結婚したい。だから離れて行ってくれてもいい」と言いました。剛さんの返事は「いずみちゃんがクリスチャンとしか結婚しない、と知って、それなら仕方がないと諦めた。でも、クリスチャンって何か分からないし、嫌というわけでもない。もしかすると自分がクリスチャンになるかもしれない。そう思うと、このまま諦めたくない。なれるか分からないけど、なってもいいと思っている」でした。私は、やっぱり主は彼を救いたいと思っておられるんじゃないか、彼にイエス様を知ってほしい、と強く思わされました。そして、自分ひとりではどうしてよいか分からなかったので、キリスト集会の年配の方に相談したところ、ご家庭に招いてくださり、イエス様のお話をしてくださいました。それがきっかけで、剛さんはわが家にも来てくれるようになり、広島の祈り会や家庭集会、日曜礼拝にも一人で出かけていくようになり、本当に素直にイエス様を受け入れていきました。そしてお互い自然に結婚を祈るようになりました。

昨年末に結婚が決まってからも、心の揺れがありましたが、最終的に主イエス様は、剛さんと結婚したい、ずーっと一緒にいたいと素直に思えるようにしてくださいました。お互いわがままで、すべてを理解し合えない者同士ですけど、イエス様という中心があれば、けんかをして素直に謝れなくても、二人で主には謝れます。感謝することもできます。お互いは変わることがあっても、主イエス様は真実で変わらないお方ですから希望は大きいです。

家族についても、あれほど嫌いだったクリスチャンホームでしたが、今は最善の家庭だったと心から思います。そこで育たなければ,石橋をたたいても渡らないほど疑い深く、誘惑にも弱い私は、一生主に背を向けて罪の中にひたり、気が狂っていたかもしれません。自分ひとりで生きてきたようでも、その背後に両親の大きな愛と、何よりもたくさんの祈りがありました。今も、私の兄弟一人ひとりがいろいろな問題を抱えていますが、主がすべてを整えてくださいますから楽しみです。そのことも祈っていきたいと思っています。



左から、牧人さん、みぎわさん、母 順子さん、みどりさん、上段 道人さん、父 久義さん。



結婚式で、夫の剛さんと。








ドイツや日本各地の集会から写真が届きました。

あおぞら

「悔い改め」。

イエスさまをしんじる人たちのなかでは、よく耳にする言葉です。みんながわかったつもりになっている、この、ききなれた言葉。でも、あらたまって考えなおしてみると…「悔い改め」って、なんだろう?

「みんなは、どう思ってる?」ある日のこと、こどもたちに尋ねてみたところ、いろんな答えがかえってきました。

そんななか、ある子の告白ともいえるお話に、とても心動かされました。みなさまにもぜひ、ご紹介したいと思います。

オレが、いじめた

日曜学校、夏のこどもキャンプでのお話です。

「イエスさまは、なんのために、きてくださったのかなあ…。」

「しってる!十字架にかかって、しんでくださるため!」

「わたしたちの、つみのみがわり!」

「う〜ん。…正解なんだけど…。なんだか、丸暗記したみたい…。ほんとうのいみ、わかってる?」

「うん!」

「じゃあ…。みんな、じぶんの罪っていうか…。よくないなあって思うのは、どんなことなの?」

「おこられるとき!」

「どんなことで?」

「だしっぱなしとか。」

「しゅくだいをしないとか。」

「ケンカしたとき。」

「なるほど。みんな、正直なのはいいけど、たいして、こたえてないようだね…。もしかすると、『あやまっちゃえばいいや!』くらいに思ってない?そこに悔い改めは、あるのかなあ。」

「『悔い改め』って、なあに?」

「なんだと思う?」

「わかんない。」

「ぼく、わかる!イエスさまに、『ごめんなさい』っていうことでしょ?」

「うーんとね、わるいってわかるだけじゃあなくって、もうしないことー!」

「そうか…。それじゃあ、みんなは、ほんとうの意味で、『悔い改めた』ことは、あるのかな?」

そのとき、しんぱいそうな顔で、ひとりの子がはなしはじめました…。

「あのね、あの、オレ…。ともだちといっしょになって、おんなの子をいじめちゃったことがある。…そんで、その子は、学校、これなくなった…。」

「…。イエスさまには、『ごめんなさい』をしたの?」

「うん…。かあちゃんがいっしょに、おいのりしてくれた。でも、その子はまだ、学校、来ない。」

「そうか…。でもね、イエスさまにおいのりしたら、ぜんぶ、ゆるしてくださるんだよ。」

「うん。でも…。その子は?」

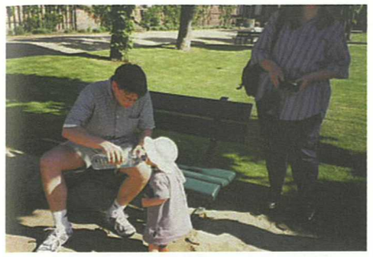
「じぶんでは、どうしようもないこともあるけど、イエスさまは、その子のこともしんぱいしてくださるんだよ。」

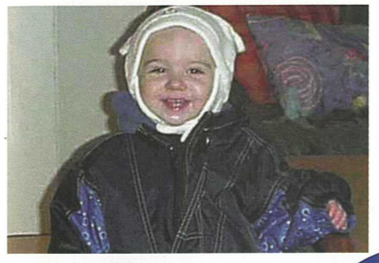
「でも…。その子はたぶん、ゆるしてくんないとおもう。学校にもこないし…。」

せんせいは、どうなの?

しばらくして、ほかの子から質問がありました。

「せんせいは、どんなふうに、『悔い改め』るの?」




らひろば

「みんなとおんなじだよ。やっぱり、やらなくちゃいけないことをしなかったり、ひとの悪口を言ったり、こころの中でわるいことを考えたり、いろいろだね。まいにち…。」

「ふうん。それで、『悔い改める』の?」

「えっ?う〜ん…。」

純朴なこどもの質問に、絶句してしまいました。

「ほんとうの意味で『悔い改めた』ことはあるのかな?」などと、へいきで質問したじぶんが、はずかしくなってしまったのです。

そんなとき、ある人から、こんなお話をうかがいました。おうちでの、親子の会話です。

ひとは、だれでも

おかあさん:「おかあさんも、しらないあいだに、おとうさんに、裏切られていたのかなあ。」

こども:「おかあさんのことは、裏切ってないと思うよ。」

おかあさん:「そう? なんだかとっても、かなしいきもち。」

こども:「でも、かみさまのことは、裏切ったことがあるんじゃない?」

おかあさん:「えっ、そうなの?」

こども:「『ひとはだれでも、裏切るものだ』って、日曜学校で言ってた。」

おかあさん:「…。」

この子は、ほんとうに『おとうさんだいすき』な子で、『うちのおとうさんは、せかいいち。やさしくって、かっこいいから。おとうさんと結婚したい。』と、言っていた子です。そんなおとうさんでも、かみさまのことは裏切ったことがあるはずだと、この子は言いました。この会話を通して非常に慰められ、イエスさまにもご主人にも、こころがちかづけられたと、おかあさんは話してくださいました。

ちょっとだけだけど、「よかったね」

さきほどのいじめのエピソードには、つづきがあります。いじめを告白した子が、べつの子たちからいじめを受けたのです。

ある日、この子がはなしかけてきました。

「オレ、いま、すげえ、いじわるされてる。」

「え、しかえしか何かなの?」

「ちがう。べつのともだち。オレが『いれて』って言っても、いれてくんない。」

「…。」

こんなとき、なんて言葉をかけていいのか、わかりません。じぶんの無力さをかんじるのみです。でも、イエスさまには、なんでもおできになります。ただ、

「いのってるね。」

と言うだけでした。そのとき、この子が言ったのです。

「うん。ぼくも、いのってるの。あと、ちょっと、あの子のきもちもわかった。ちょっとだけだけど、『よかったね』って、みんな言ってる。」

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。(2コリント　4・15)

しかし、主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント　12・9)

原稿募集　各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。(子どものプライバシー保護の意味いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。)子どもたちの、ふとしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

(送付先　〒181-0005　三鷹市中原3-1-55　清水洋一)

イエス様のよみがえりを感謝

イースター

の日

れ、イエス様のよみがえりを記念し、感謝する日です。イースターは
満月の、次ぎに来る日曜日」と決められています。

様。

たちの罪の身代りとなって血を流し、いのちを捨てて私たちを救っ
、十字架の上で「完了した。」(ヨハネ19・30)と叫んで息を引き取ら
し(ルカ23・53)、三日の後(ルカ24・7)によみがえられました。その
く書かれています。そのごく一部をご紹介しましょう。

**四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな
いることを使徒たちに示された。 (使徒1・3)**

**ろして墓の中に納めました。しかし、神はこの方を死者の中からよみ
自分といっしょにガリラヤからエルサレムに上った人たちに、幾日
徒13・29-31)**

**、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れ
で、信じる者になりなさい。」 (ヨハネ20・27)**

を、ぜひ聖書で読んでみてください。よみがえられたイエス様は、何
たちに、また私たちに語りかけておられることでしょうか。

ス様は、弟子たちに現れて四十日の後、弟子たちが見ている前で、

に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。(使徒1・9)

**ストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上
かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばか
てもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。
(エペソ1・20、21)**

!

生きて働いておられる!私たちにいつも目を注ぎ、限りなく愛していて
な喜びであり感謝でしょう。この喜びこそ、イエス様を信じる者だけ
、他の、いわゆる宗教と言われるものは、みな、「死んでしまった人間
ん。死んだ人の教えが死の恐怖から人々を解き放つことはできません。
おられるイエス様のみが人間を死の問題から解放することがおで
せん。救いはただ、イエス様のみにあります。救われるために人間に
よみがえって今も生きて働いておられるイエス様なのです。このイ
ら、あなたは救われ、主の永遠のいのちにあずかるのです。

**よみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
(ローマ10・9)**

再び来られる。

るイエス様は、やがて再び来られます。

らの声と、神のラッパのうちに、ご自身天から下ってこられます。そ
まず初めによみがえり、次ぎに、生き残っている私たちが、たちまち
に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして私たちは、
なります。 (テサロニケ4・16)



太陽と月の小さなお話

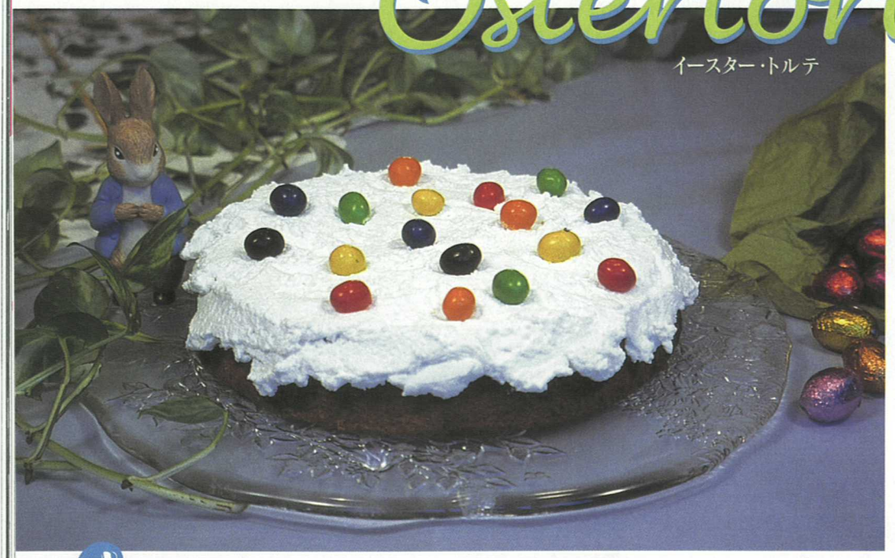
お日さまとお月さま。
てこう呼んでいる太陽
で、際立った輝きを放っ
しかし、その輝きには本
太陽が自分で光を発し
太陽の光を反射してい
は、光そのものイエス
ているキリスト者(人間
そして、月に満月や半月
に、キリスト者にも、満
ス様の光を反射して輝
の人がいるのではないで

違いは、まだありま
姿です。いつも丸い姿の
ち欠けの変化をします
照らされている)部分が
関係によって、多く見え
ためです。この位置関係
地球を一周し、その地球
に、29日半(約1ヶ月)
す。満月から次の満月、
の一巡りが29日半に

皆さんご存知の日食
一列に並ぶときに起こ
ぼです。太陽・月・地球の
地球・月の順に並ぶと
も見ものは、全体像が
日食は、太陽が消える
間の光景の激変が圧巻
ます。一方、皆既月食は
部始終を肉眼で観察で
行き、光を失い、再び満
わりに、イエス様の死と
人がいてもおかしくな

Ostertorte

イースター・トルテ



復活祭を祝うお菓子

イースターの食卓に華やかなトルテを

イエス様のよみがえりをお祝いするイースターに、ヨーロッパの家庭ではいろいろなケーキをつくります。かわいい「イースターのうさぎ」、ユーモラスな「イースターのあひる」など動物をかたどった菓子パン、羊の型を使って焼くケーキ、華やかなトルテなどです。ここでは比較的手軽に作れるイースター向けのトルテを紹介しましょう。春への希望もこめられたケーキです。準備に多少、手間がかかりますが、あとは楽につくれます。デコレーションも簡単ですので、慣れていない方や不得意な方も是非、挑戦してみてください。色とりどりのお菓子で飾ったトルテは目にも楽しく、ヘーゼルナッツの風味も格別です。　プリギッテ・野口〔ビッキー〕



ビッキーのケーキづくり

材料



台

- 卵　5個(M玉)
- 砂糖　175g
- ヘーゼルナッツ　250g
- レモン　1個
  - ・皮-1個分
  - ・絞り汁-大さじ1

デコレーション

- 生クリーム　200cc(1パック)
- ラム酒　大さじ1
- 粉砂糖　大さじ1.5　（好みで調節）
- 飾り用菓子　適量　卵形のチョコレートやゼリービーンズなど何でも良い。

道具



- ・フードプロセッサー（チーズクレーターでも良い）
- ・ボール　・泡立て器
- ・ヘラ　・パレットナイフ
- ・ケーキ型 -21cm以上の丸型（パウンド型や、角皿でも良い）

作り方

下準備

a. ヘーゼルナッツをから煎りし、皮ごとフードプロセッサーかチーズクレーターでおろす。



b. 型にバターかマーガリンを塗っておく。



c. 卵を卵黄、卵白に分けておく。



1 先に卵白を泡立てる。だんだんとかたくなり始めたら砂糖50g位(175gのうちの50g)を少しずつ入れ、しっかり角が立つまで泡立てる。



しっかり角が立つまで





落ちたところがリボン状に

2 卵黄をほぐし、砂糖の残りを全部入れ泡立てる。白っぽくなり、泡立て器を持ち上げてひらひらとリボン状に重なって落ちるようになるまで泡立てる。







3 2の卵黄にレモンの皮をすり入れ、レモン汁大さじ1を入れて泡立て、ヘーゼルナッツを少しずつ入れながら混ぜる。

全部混ぜると重くなってくるが、後で卵白を混ぜると良い具合になる



卵白の泡がつぶれないよう切るようにさっくりと混ぜる

4 3の生地に1で泡立てた卵白を2回に分けて加えヘラで混ぜる。卵白はそっと崩れないように入れて混ぜる。



5 型に流し入れ、180℃のオーブンで30～40分焼く(機種による)。竹串で刺し、何もついてこなければオーブンを消し、そのまま中に置く。15分くらいたったら出して冷ます。



最後はオーブンの余熱で焼き上げる

6 生クリームにラム酒大さじ1、粉砂糖大さじ1.5を入れて泡立てたものを、十分に冷ましたスポンジの上にのせ、パレットナイフでのばす。



クリームをたっぷりのせてナイフでのばすだけ

7 卵形のお菓子などを飾りつけたら、できあがり。



前号の「シュトレンの作り方」材料の記載に誤りがありました。生地の砂糖の量は100gではなく50gです。お詫びして、訂正いたします。

ごいっしょに祈りましょう。

ナイジェリアでの「実を結ぶ命」出版について



前号でご紹介し、ともに祈っているナイジェリアでの「実を結ぶ命」出版については、その後もいろいろな妨害、迫害があり、難航しています。主によって守られ、一日も早く出版され、ナイジェリアに福音が伝えられますよう、引き続きごいっしょに祈りましょう。

信仰の歌(暫定版)ができました。



前号でご紹介し、ごいっしょに祈った「信仰の歌」は、主が答えてくださり、主の御手が働いて、あっという間に形が整い、ドイツの歌百数曲が暫定版として刊行されました。従来集会で使っていた「聖歌」(いのちのことば社刊)は絶版になり、在庫が切れた後は入手不可能になります。

「聖歌」に頼っていては、新しく救われる方々は楽譜が手に入らず、近い将来集会の礼拝、賛美もできなくなるでしょう。新しい「信仰の歌」は、ベックさんが一生をかけて伝えてくださった聖書の真髄を、ストレートにオリジナルの歌詞にしたもので、信仰の内容、言葉使いなどキリスト集会にふさわしいものになっています。また、従来歌い馴れた曲についても、百数十曲を新しい歌詞に改めて編纂、全二百数十曲を「信仰の歌全曲版」として刊行の予定です。全曲版が早くできますよう、また、集会のみなさまが一日も早く新しい歌と歌詞に馴れ、心を一つに賛美できますように引き続きごいっしょに祈りましょう。なお、新しい歌と歌詞に馴れていただくため、集会の独唱者、コーラスによるすてきなCDも逐次発売されます。ぜひご利用ください。

結婚・葬儀のご報告

Wedding 結婚

もしひとりなら、打ち負かされても、
ふたりなら立ち向かえる。
三つ撚りの糸は簡単には切れない。
(伝道者　4･12)

09/22
小野澤 仁範・千帆





10/08
森田 智教・由貴子





10/13 和田 周作・亮子



10/14
有賀 耕介・なおみ



10/20
関本 英樹・美奈子

11/11
重枝 豊・恵

Funeral 葬儀

「死に至るまで忠実でありなさい。
そうすれば、
わたしはあなたに
いのちの冠を与えよう。」
(黙示2･10)









09/03 豊増 カズ子	10/22 樋田 主徳
09/12 吉田 漱	10/23 笈川 住江
09/24 青木 清	11/24 今井 忠男
09/28 原木 幸子	11/27 平山 輝忠
10/03 金子 泠子	12/17 勝野 貞義
10/08 望月 光子	12/19 小川 ヒデ
10/09 小泉 晶子	12/19 神田 茂
10/22 関根 敏子	12/29 白石 住子
	12/30 谷 憲介